

トルストイの日露戦争観

加藤直士譯

附録『ト翁時局談』  
新聞記者訪問録

及『倫敦タイムズの批評』

101251-000-2

984-cT65tK

トルストイの日露戦争観

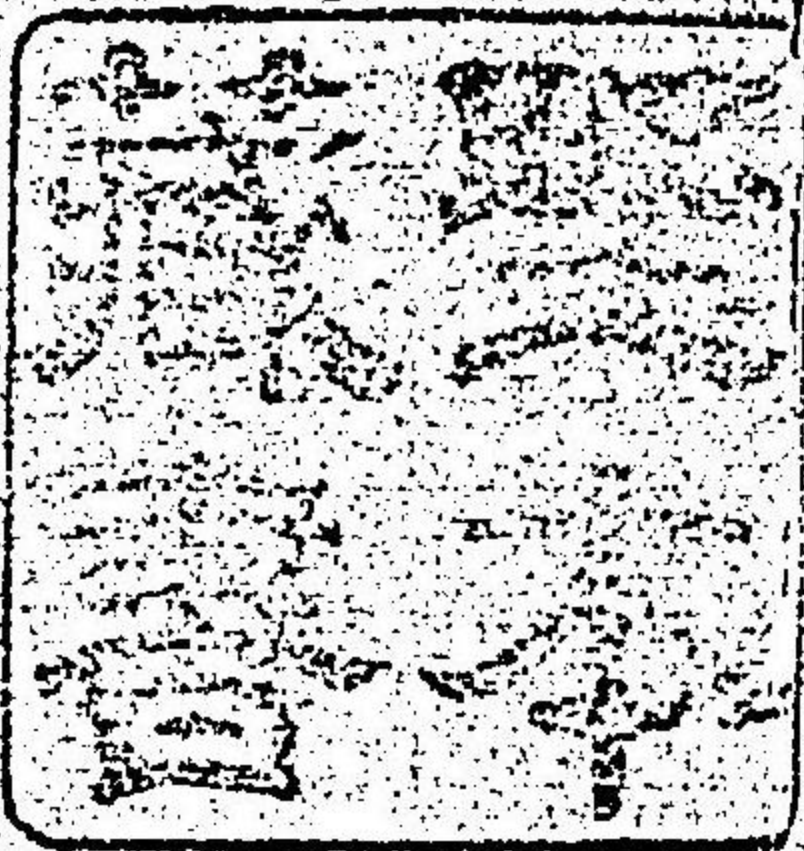
加藤 直士/訳

M37

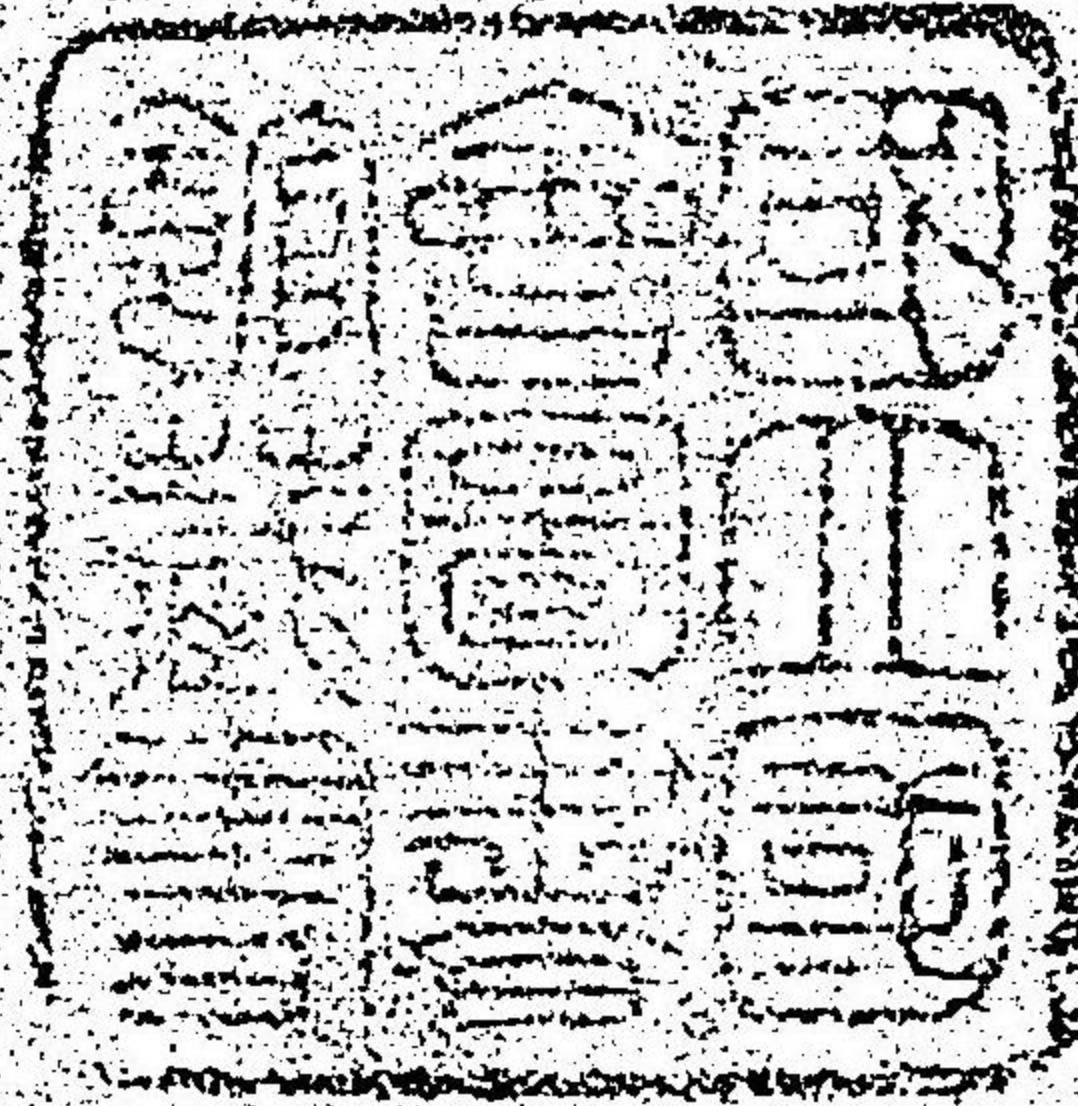
DBY-0579







984  
T65  
K



224509





イトスルト



## 小引

一幹の筆能く天下を動かすとは蓋し卜翁の謂歟。日露戦争觀の一たび倫敦タイムズ六月二十七日の紙上に現はるゝや、世界の耳目は爲めに聳動せられ、就中邦人の争ふて其内容を窺ひ知らんと欲すること營に大旱の雲霓のみにあらざるなり。余や甚だ卜翁に負ふ所ある者、乃ち之を我邦に紹介するの義務ありと思惟し、敢て秃筆を呵して此譯を成せり。金玉を變じて瓦礫となすの譏りは固より期する所。然るに卜翁の此論を紹介するを以て任せる



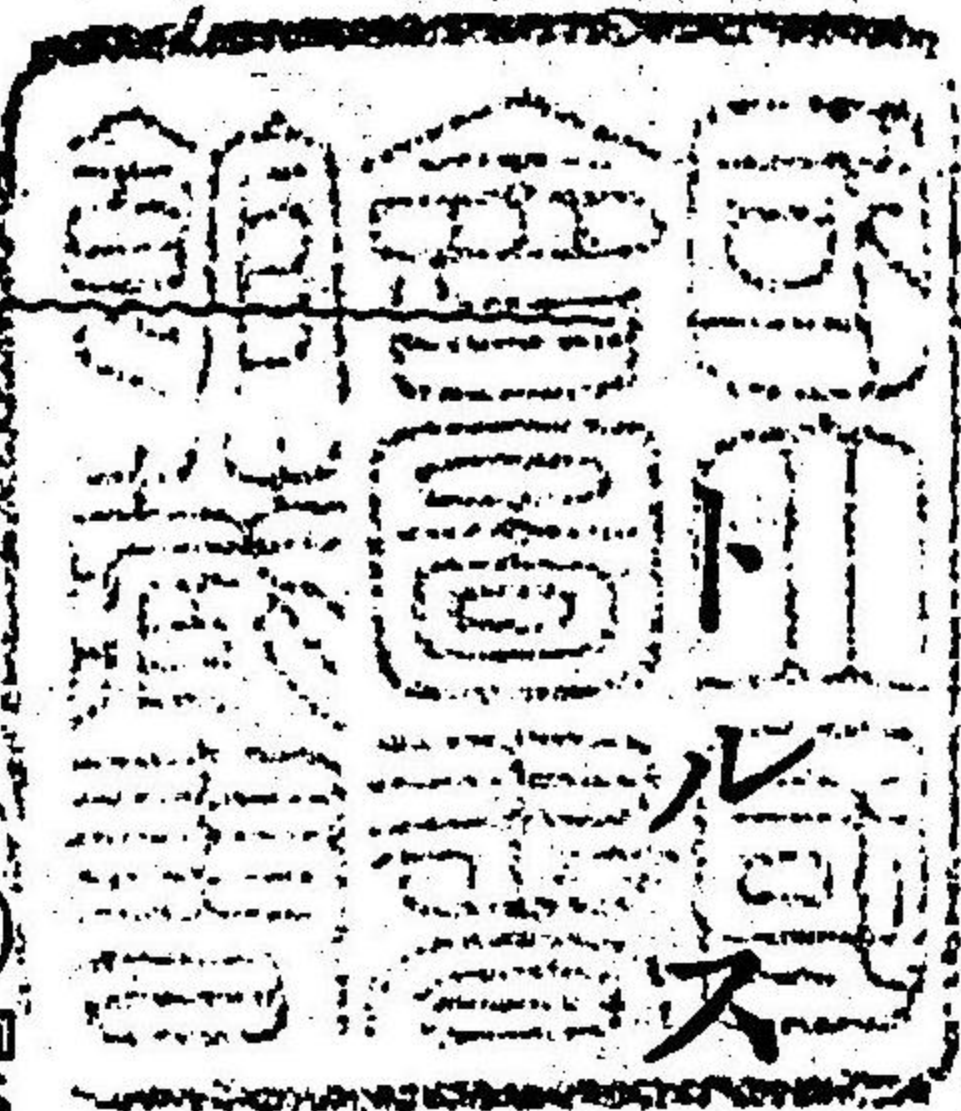
もの獨り余のみならず、タイムズ新聞の我邦に到着するや、東京朝日新聞先づ逐號之を譯載し、平民新聞亦全紙面を割ひて之を譯出せり(一論文にして世人の注意を惹けると未だ曾て斯くの如きは有らざりき)余即ち此等の譯文をも參照し、又は其一部を採用し、以て茲に稍や完全に近しと自信する譯文を出すを得たるは、余の竊かに満足に堪へざる所、又深く兩新聞譯者の勞を多しとして感謝する所なり。附録佛國フ非ガロ新聞記者の訪問録に至りては、四月二十七日の紐育週刊ポストに掲載する所を譯述せるもの、以て兩々相待つてト翁の意見の全豹を知

悉するの便に供せり。今や日露の戦局益々急迫、邦人日夜旅順の陥落を期待しつゝあるの時に際し、敢て此書を世に出す所以のもの、聊か以て我國民の反省を促がし、併せて露國思想界の暗流を知らしめんが爲めのみ。若夫れ此論文を通じて見らるべきト翁の人格其物に至りては余の最も熱心に紹介せんと欲する所なり。知らず我が邦人果して此書を愛讀するの餘裕ありや否やを。

明治三十七年八月十日

譯者識





# トイの白露戦争観

加藤直士譯

○『爾曹悔改めよ』

今は爾曹の時、且つ暗黒の勢なり

《路加傳第二十二章第五十三節》

## 第一章

又も戦争は生まれり、何人にも無用無益なる困厄此に再びし、詐欺此に再びし、一般人類の愚妄残忍亦此に再びせんと



す、

東西相隔つること幾千里、一は殺生を禁斷せる佛教の徒、他は博愛を標榜せる基督の徒、而して兩者互に野獸の如く海に陸に他を搜索して之を虐殺し殘害せずんば已まざらんとす、嗚呼是れ抑も何事ぞや、是れ夢か將た眞か、今や實にあらしむ可らざる、又あり得べき性質のものにも非ざる一事は起れり、人は皆其の一場の夢に過すして之より覺め來る時のあらんとを信せんと欲す、然れども、あらず、こは夢幻にあらずして悲しむべき現實なる也、

實にも彼の憐むべき無智蒙昧なる日本農夫が其田園より放たれ、佛教の眞髓は必ずしも衆生に對する慈悲に存するに非ずして、諸の偶像に對して犠牲を供するとに存すと教へられ、若くはツロー又はニジニヴゴロド附近より出でたる無學文盲の露國人が、基督教の精粹は基督聖母諸聖徒及其聖像を禮拜するに在りと教へられ、而して此等不幸なる兩國の愚民が、幾百年の間に受けたる暴戾と欺罔とによりて、宇内の大罪たる同胞の殺戮を以て有徳の行爲と認むるに至り、其極遂に自ら此極惡重罪を犯して何等自己に罪あるを悟らざるに至れるが如きは、必ずしも人の解し得ざ



る所に非ず、

然れども彼の世に有識者と稱せらるゝ所の者が如何にして能く戦ひを説き戦ひを賛し戦ひに加はり甚しきは自ら戦ひの危険を蒙むるとなくして他を教唆して戦ひに出でしめ、無告の同胞を之に臨ましめ得べしとする乎、彼の所謂識者なる者は、必ずしも基督教の教ふる所に限らず、たとひ彼等が基督教徒なりとするも、唯一般戦争の慘酷無用無意義に關して古來人の説き來り又た現に説きつゝある所のものを、よも心得居らずといふとあらざるべし、彼等の識者と認めらるゝ所以は、實に盡く此等の事を心得居るに由る

のみ、彼等は嘗に之を心得居るのみならず、其の多數は之に關して書きもし語りもしつるとある也、彼の全世界の讚嘆を博したる海牙の平和會議、又は國際間の紛議は國際間の調停に由つて解決せらるべきとを辯説したる書籍、小冊子、新聞記事、及演説等を引照する迄もなく、如何の識者が能く列國兵備の競争が、其末遂に無窮の戦鬪か、又は一國の破産か、若くは兩者を兼ねる大困厄かを來すに至るべきを知らざらん、戦争の害は其戦争準備中人類の勞力より成れる巨萬の財寶を無意義無目的に費消するに在るのみならず、其戦争繼續中人生最も生産的勞働に適したる幾百萬屈強の



壯丁を之に死せしむるに在ると所謂識者の知らざる能はざる所(現に前世紀の間に於ける戦死者の總數實に一千四百萬に上れり)又戦争の由て来る所以は、人間一人の生命を費すは愚か、其戦争中費消せる總額の一百分の一をだに償せざる底の些々たる理由たるに過ぎざることとは所謂識者の知らざる能はざる所、現に奴隸釋放の爲に戦へる戦争の費額は凡ての奴隸を釋放する爲に要すべき賠償金額の上に出でたり。

就中戦争が最劣等なる獸慾を催進し人類を墮落し獸化せしむるものなることは人の普く知れる所、又デマイステル、

モルトケ其他の主戦論者の説が弱點を以て満ち居るとも亦人の普く知れる所也、彼等の論據は如何なる人間の災害にも必ず之に伴ふ利あるを發見し得べしとする詭辯、又は戦争は從來常に存在せるが故に、今後も亦常に存在せざるべからずとする獨斷の上に存するに過ず、是猶如何なる人間の不正の行爲も之に伴ふ利益だにあらば以て之を許すべしとなし、又長年月間行ひ來れるものならば以て之を恕すべしといふの類のみ、斯ばかりのとは所謂識者の普く知悉せる所、而も突如として戦ひの開くるに會して彼等は皆之を忘却し了んぬ、前日戦争の慘酷無用無意義を論證せし



八  
人の今日に至りて口にし筆にする所は、成るべく多數の人を殺さんとする、成るべく人間生産の最多額を破壊せんとすること、及び彼の平和にして無害勤勉なる人民の心裏に成るべく甚しき憎惡の念を激成せしめんとすることは、のみ、然り此等曲學の識者は、實に人民の勞働に依りて其衣食を得、生活を支へながら、却つて彼等人民を強て、其良心安寧、若くば信仰に背きて、這箇の暴舉を敢てせしむる者也。

## 第二章

今や其殘酷誑詐及愚昧の點に於て、到底人の了解し得べからざる又實際にあり得べしとも覺えぬ一事は起れり、露國皇帝は是れ當年平和の爲に列國の民を激厲したる者、其人今や戰を宣して告ぐるに彼が愛せる平和の維持の爲、其全力を盡せるにも拘はらず、實にも其盡力なる者は他國民の土地を侵畧し其盜奪したる土地を防禦せんが爲に兵力を増加したるに過ぎざること明なり、今日日本の攻撃に對せんが爲に日本人が露國人に對してなさんとする所を日本人に對して露國人になさしめんと、即ち日本人を殺戮すべき



とを命令せるを以てす、而して彼は此の殺戮の命を傳ふるに當りて神を呼び、此の宇内の極悪重罪の爲に神の祝福を得んことを求めたり、日本國の露國に對して宣言せる所亦之に同じ、

ムラビエフの如き、マルテンスの如き科學者、法律家は、前年世界の平和の爲に列國の民を召集したると、今日他國の領土を占領せんが爲に戦はざるべからざるに至りたる、とが、必ずしも氷炭相容れざるものに非ざるとを論證する、と頗る努めたり、又彼の外交家なるものは優麗なる佛語を用ひて公文を移牒し、露國政府が平和確立の爲に其の全力

を盡したるも、其實は他國を欺罔せんことに全力を盡したる也、結局當該問題の合理的解決の唯一手段として、人類殺戮の道に出でざるべからざるに至りたることを事も細やかに陳辯せり、尤も何人も之を信ぜざるべきことは彼等の夙に知れる所なり、日本外交家の爲す所又之と相同じ、科學者、歴史家、哲學者等は各其壘に據りて巧みに現在と過去とを比較して、之より深邃なる結論を抽出し、或は國民發展の法則に就て、或は黃白人種の關係に就て、或は佛耶兩教の異同に就て論辯、少時も休まず、結局此等論辯の結果、基督教徒が黃人種を殺戮するとの咎むべきに非ざるを證明せんと



す、日本の科學者哲學者が日本人の白人種を殺戮するの咎むべきに非ざるを論ずること亦又之に同じ、新聞記者なるものは虚偽も不實もかまはゞこと、只管露人の獨り正しく獨り強く獨り善にして、日本人の一切の點に於て不正不義怯懦なることを論證し、及露國に對し敵意を有し又は有すべき英人米人の如きを盡く惡人なりと斷定せんとす、而して日本人及日本最負の徒が露國人に對して言ふ所亦毫も之に異ならず。

其の職務上殺戮の事に従ふべき軍人の徒は更にもいはず、大學教授の如き社會改良家の如き學生の如き貴族の如き

商人の如き彼の所謂有識者なる者は、己れ何人にも又た何事にも強ひらるゝ所あるに非ざるに、一面に於ては前日迄和樂し若くは些かの恩怨を止めざりし日本人英人又は米人に對して最も甚しき嫌厭憎惡を表し、他の一面に於ては憎惡せざる迄も心服はし居らざる、否な平生は極めて無頓着なる露帝に對して、何等の強迫なきに忽ち媚を呈して卑陋なる屈從の意を表し、之に對して無限の忠誠を抽んで何時にても陛下の利害の爲には其生命を捧ぐべしなど嗜けり、

一億三千萬民人の上に君臨せる此不幸なる昏迷せる一青



年は、斷へず他の爲めに欺罔せられ、又絶へず自家撞着の行爲を強ひられつゝ、自國と呼び得るの權利ありや否やの甚覺束なき國土の保護の爲に、殺戮の事に従ふべき所謂忠良なる自己の軍隊に向つて、常に感謝の意を表し其祝福を祈れり、而して兵員は相互に教育ある者のみならず無學なる農民だに猶且つ漸く抛棄し去らんとする(奇怪の聖像を贈答し、一同其前に跪拜し接吻し、又何人も其心より信せざる華麗にして而も虚偽なる演説を以て送らるゝなり、富者は其不義の財寶の中より言ふにも足らぬ小部分を割きて此虐殺事業の費に貢ぎ、貧者は年々二十億留の苛税に窘みな

がら尙半文錢を獻じて之を助くるを辭せず、政府は又遊手無職の徒を獎勵して露帝の肖像を奉じて軍歌を謠ひ萬歳を叫びて街上に徘徊せしむ、而して此徒は愛國心の口實の下にあらはる放縱逸樂を極めて憚らず、露西亞全國上は皇宮より下は邊邑僻村に至る迄、苟も教會牧師たる者は自ら基督教徒と稱しながら、敵を愛すべきを教へたる神、博愛仁慈を旨とし玉ふ神に向つて人類虐殺を行ふべき惡魔の事業を祐助せられんことを懇禱せざるなし、祈禱、説教、獎勵、行列、戰書、新聞に魅せられたる大砲の食料たるべき數千數萬の人は、軍服きらびやかに銃劔儼めしく、老



親妻子を棄て内心の悲哀を隠して故さらに快活を装ひ、行いて我生命を賭して、其未だ曾て相見たることなく、未だ曾て己に何等の害を加へたることなき人々を殺戮せんが爲めに出發す、之に従ふ醫員看護婦は左ながら屠戮に従事する者を療養看護することのみを知りて、内地に於ける無数の質樸平和なる困厄の民の療養看護すべきあるを知らざるに似たり、又家郷に残れる者は人の殺されたるを聞きて狂喜し、日本兵の死傷夥多なるの報に接しては、彼等が名けて神と稱する、或物に向つて感謝するなり、  
如此の事、總て高尚なる志氣の發揚として目せらるるのみ

ならず、若し此發揚に興みせずして、多數の迷妄を解かんと力むるの人あらんか、彼等は直に逆賊、裏切人として目せられ、殘酷なる暴徒の爲めに凌辱され、歐打さるゝの危険あり、獸力は是等暴徒が其狂暴を維持せんが爲めの唯一の武器なれば也、



ポルトガル、モンテリス、バスカル、スウヰフト、カント、スピノザ、其他幾百の記者は、皆口を極め力を奮つて戦争の狂愚無益を説き、其慘酷不徳暴虐を明かにせり、而も今日此等諸説の世に顧みられざると、左ながら此等記者の一人も未だ會て世に存せざりしが如く、就中人類同胞の教を布き神の愛と人の愛とを説きたる耶蘇基督といふもの、未だ曾て世に出でたるとなきが如し、

人若し是等の事を回想し、而して此四邊の光景に對する時は、戦争を嫌忌するよりも更に一層大なる恐怖を感ずべし、

そは有らゆる恐怖中の最大恐怖にして、人間の理性の無力なるを感ずるの自覺即ち是れ也

夫れ人畜相分るゝ所以、人間が人間としての眞價を存する所以は、其理性を具へたる點に在り、而も今日の如くんば理性は左ながら手綱の馬背より放れて其の兩脚に絡めるが如く、畜に無用の長物たるのみならず却て其行動を妨害し其氣をいら立たしむるに過ぎざらんとす、

若夫れ之をして異教の徒、希臘人、羅馬人、若くは福音の何たるを知らず唯教會の命する所に盲從せる中世基督教の徒ならしめば、其の相戰ふも、戦うて武勳を誇るも、敢て解し得



ざる所に非ず、然れども信仰ある基督教徒、若くは信仰はな  
くとも當代の哲學家、道德家、美術家の所作によりて、知らず  
識らず、人類博愛といへる基督教の理想に浸潤膚受したる  
者が、如何にして銃を執り、砲を守り、同胞人類の間に馳驅し  
て成るべく、多數を殺戮せんと狙ひ得べしとする乎、  
若し之をしてアツシリア人、羅馬人、希臘人ならしめば、戦争  
が其の良心に背かざるのみならず、却て正義の道に合すべ  
きとを教へられて之を納得することなきに非ず、然れども  
我等は忌でも應でも基督教徒なり、而して基督教の教義が  
如何に退歩し、轉訛し來りたればこそ、其大體の精神は我等

をして渾身戦争の無意義慘酷にして、正義公道に反せるも  
のなると感ぜしめざる能はざる、理性の上層に我等を導  
くものならずんば、あらず、随つて我等は彼等異教徒の爲せ  
し如く、毅然、泰然、平然として、其蠻行を敢てするを學ぶと能  
はず、我等にして若し一度之を犯さんには、己れ忽ち其罪惡  
を自覺し、殺人犯者が兇行に着手したる後、良心の苛責に遭  
ひ、更に之を遂行せんが爲に、故さらに怒に棄して、前後を忘  
却せんと圖るが如き感なきを得ざる也、

當今露國の上流社會に起れる不自然にして、狂愚なる動搖  
は、畢竟此戦争の罪惡を自覺せる表章たるに過ぎず、凡そ彼



の君主に忠誠なれと云ひ彼を禮拜せよといひ、生命(他人の生命のみ自己の生命には非ず)を鴻毛の輕きに比せよといふが如き無禮なる虚偽的演説、凡そ彼の誠意を以て自己の所有にも屬せざる國土を護るべしと云へる約束、凡そ彼の諸種の旗幟及奇怪なる聖像を贈答して相互の祝福を祈ること、凡そ彼の神頼みの讚美歌、凡そ彼の毛布繙帶の準備、凡そ彼の看護婦の派遣、凡そ彼の政府政府は戦ひを宣したる以上己れ自ら必要なる艦隊を組織し傷者看護の法を講ずべき義務を有し、又自ら何程にても必要なる費用を人民に課し得べき權能を有す)に向つて軍艦費及赤十字費の寄贈

凡そ彼の新聞紙が重要事件として報ずる各地のスラブ的なる無意義なる華奢冒瀆の祈禱、凡そ彼の行列國旗喝采、凡そ彼の新聞紙の餘りに普通なるが故に敢て曝露を恐れざる如き大膽不敵なる虚偽、凡そ斯の如き露國の上流より次第に下層に傳播せんとする愚妄残忍の性情行爲は盡く自己が犯せる罪過を自覺せる兆候たらずんばあらざる也、人の良心は往々人に向つて其の現に爲せる所が實際爲すべからざる不正の事たるを語るとあり、されども人を殺さんとする者が既に一たび其事に着手したる以上復た之を中止する能はざるが如く、露國人も亦戦争が既に初まれる



以上、今更之に向つて兎や角言ふべきに非ずと思惟せる也、戦ひ既に初まれり故に之を繼續せざる可らずとは單純なる無智無識の徒が區々たる情慾と迷忘の執着心に驅られて等しく感ずる所なり、而して現時の最も教育ある人士も亦正に之と同一の論證を爲さんとせり、曰く、人は自由意志を有する者に非ず、故に其の一たび開始したる事件は、假令害惡を悟ると雖も、最早之を中止すること能はずと、斯くて眼既に眩じ心既に獸化せる人々は、滔々相率ゐて皆此恐るべき殺戮事業を續行す、

#### 第四章

試みに其老親妻子を棄て、戦ひに向へる兵卒下士等に向つて、何故に其の自ら知らざる人を殺さんと準備する乎を質せ、彼は先づ其質問に對して奇異の感をなすべし、以爲らく身は是れ兵也、兵役に服すべき宣誓をなし居るなり、其上官の命に従ふは固より其の義務のみと、人若し彼に向つて戦争即ち人類殺戮は、汝殺す勿れの戒めに背くことなきやを問はば、彼は必ず、我等攻撃を受けたる時則ち之を如何すべき乎、君の爲、又正教の爲、戦はざるべからざるに非ずやと答ふるなるべし、現に一兵卒は余が質問に對して反問すら



「敵若し神聖なる一物を攻撃せば如何せんか」と余乃ち神聖なる一物とは何ぞと問へば曰く問ふ迄もなし、軍旗是也と人若し斯の如き兵士に向つて神の訓戒は軍旗及其他世界に於ける何物よりも大切なるを説きたらんに、彼は黙して何事をも言はざるか、又は怫然怒つて之を上長官に訴へんのみ、

更に纏つて士官將校に向つて何が故に戦ひに臨むかを質せ、彼は必ず己が軍人なること及び軍人が祖國防護の爲に缺くべからざる者なるを答ふべし、若夫れ殺戮が基督教の精神に悖るといふが如きは彼の固より意に介せざる所

彼は斯の如き教への法則を信せず、たとひ之を信ずとするも、そは其法則自身を信するに非ずして、唯其法則に對する一種の解釋を信するのみ、加之彼はかの普通兵員の爲す所の如く「己は何をなすべきか」といふ自己一身の緊急問題を起さずして、國家或は祖國といふが如き一般的问题を拈起し、祖國の危險に瀕せるの今日我の爲すべき所は議論に非ずして活動に在りといふなり、

更に又纏つて其の詭計に依りて戦争を準備せしむるに至りし彼れ外交家なる者に向て、何が故に此の如き舉に出でたるかを質し見よ、彼等は必ず答へて曰はん、彼等の運動の



目的は列國間平和の確立に在り、此目的は空理空論に依つて達すべからず、唯外交的活動と戰鬪的準備とに依つて達し得べき而已と、而して恰も將校兵卒が自己一身上の問題を棄て天下國家の一般問題を拈起し來るが如く、外交家も亦露國の利害、他列國の横暴、又は歐洲に於ける權力平均問題に就て云々し、絶えて自己の地位及其活動に就て語る所あるなし。

更に又翻つて新聞記者輩に向つて何が故に彼等が其筆に依つて戦ひを教唆したるかを質さんか、彼等は必ず戦争が概して必要有益なる中にも、殊に今回の戦争の必要有益な

るを答へ、更に之を證するに意味の不明なる愛國的文句を以てせんとするなるべし、而して一新聞記者として一個人として一個の活ける人間としての彼が、何故に某々の行動に出でたるかを問はるゝに及びては、彼も亦軍人外交家と同じく直ちに話頭を他に轉じて、喋々國民の利害國家文明白人種等の問題に就て語るあるのみ。

其他苟も今日の戦ひを醸生せしめたる各般の人物が、何故に斯る事業に加はれるかを問はるゝに及びて、其答ふる所は盡く同一轍に出づ、彼等は恐らく異口同音に曰はん、戦争廢止は固より其望む所なりと雖も、今日は到底實行し難き



事に屬す、露國人民として又貴族の戸主、地方自治體の代表者、醫師、赤十字社員といふが如き夫々の地位に在る者として、彼等は孰も活動せざるべからず、議論に時を消すべからず、従ふべき共同の大事業目前に在る時如何ぞ安閑として自己一身を顧みることを得んやと、事件の全部に對して責を負ふべき露帝に在りても亦同じ、露帝に向つて戰爭の要不要を問ふ者あらば、露帝は前に掲げたる兵員と同じく其質問に對し奇異の感をなすべし、彼は戰爭が今日にても尙制止し得べきものなることにすら想到せず、而して彼は言はん、とす、朕は全國民の要求せる所を實行せざる能はず、朕

は戰爭の大害を認め之が廢止に全力を盡し又盡さんと欲すれども、今日の場合に到底戰ひを宣せざる能はず又之を續けざる能はず、是實に露國の幸福と光榮との爲に已むべからざる所なれば也と、

獨り今帝のみといはず其他の某々、イワン、ベートル、ニコラスの諸帝が殺人を禁じ博愛を教へたる基督教を奉ずと稱しながら、何故に已れ戰ひに加はり、暴虐、劫掠、殺戮に加はれるかと問はば、彼等の中何人も先づ其祖國、信仰、名譽、文明、若くは全人類の幸福（概言すれば漠然捕捉すべからざる或物）の爲のみと答ふることに必然なるべし、殊に斯の如き人々は



平生戦争の準備其組織及之に關する議論に忙殺せらるゝが故に、偶ま閑を得るも唯其勞働より休息するに止まり、絶えて其人間一生の問題に時を假さず、却て之を以て無用のとなす也。

## 第五章

我が基督教界の人々及一般現代の人々は、宛がら道を踏み誤りし人の、行くこと愈遠くして道を失ふこと愈甚しきに似たり、我が進み行く道の果して正しきや否やを疑ふと益深きに連れて、益脚を早めて向ふ見ずに取り急ぎ、いづれ結局は何處にか到着すべきを思ひて漸く自ら慰む、而して其末遂に我が取れる道は唯峻崖に己を導くに過ぎざるを知り、而かも其峻崖や近く眼前に横はるを見るの時あるべし。

現代の基督教徒の地歩亦之に同じ、我等若し我等が今日の



如く、個人の生涯に於ても又國家の生涯に於ても、唯自己若くは自國の幸福を唯一の目的として生活せんとを期し、而して現に我等が今日の如く、此幸福を得んが爲に手段を暴力に取り、随つて各人各國相互に加ふべき暴力の増進をのみ是れ圖らんには、我等が生産力の大部分を兵備に費し、最偏強なる壯丁を戦闘に殪し、其極竟に我等の墮落荒廢亦奈何とも爲す能はざるに至らざるばあらず、

實際其の斯の如き結果に至るべきとの確實争ふべからざるは、猶ほ數理上並行せざる二條の直線が未必ず相合するとあるべきが如し、是れ啻に學說の上に於て又思想の上に

於て明かなるのみならず、現に我等の見聞自覺する所に徴して明か也、我等が近づき來れる峻崖は既に我が目前に顯れたり、尤も粗撲無教育にして且つ尤も哲理に疎き普通の民と雖も、今日の如く武装益嚴に殺戮益慘を加ふるの結果、我等は遂に壺中の蜘蛛の如く互に相殘害するに終るべきを看取せずんばあらざるべし、

羅馬やシャールマンや、ナポレオンが計畫せる字内の統一の如き、中世に於る法王の權勢の如き、神聖同盟の如き、歐洲の均勢の如き、列國平和法廷の如き、又は兵力の増加、有力なる武器の改良發見の如きとに依りて、世界現狀の改善を計



り得べしと思惟する者昔は之ありたらんも、今日誠實にして分別ある者は何人も斯の如き空想によりて自ら慰むること能はざるなり。

夫れ歐洲列國を打して一丸となし、此に一大帝國又は共和政を樹立せんとするも、列國各種の民は決して之を欲せざる以上、是れ到底行はるべきとに非ず、國際平和法廷を設けて國際間の紛議を決せんとするも、斯の如き法廷の判決が如何にして幾百の軍隊を有する爭議の一方對手に強制するを得んや、然らば擧げて武装を解くべきか、何人も之を希望せず又之に着手せんとを欲せず、然らば一層猛烈なる

破壊力の新武器を發明すべき乎、輕氣球に毒瓦斯を充せる爆裂彈を載せて敵人の頭上に浴せかくべき乎、一國之を用ふれば各國皆競つて同一の新武器を用ふべく、而して大砲の餌食たる兵士に至りては、唯前日銃砲の初めて用ひられし時、從來劍戟に倒れたる者が銃丸に倒るゝの差を生ぜしが如く、而して更に今日は柔順にも砲彈、爆裂彈、長距離砲、機關砲及び地雷火等に其身を曝すが如く、今後は又た更に輕氣球より投下せられたる毒瓦斯に倒るゝの差を生ずるに止まり、結局何等の改善する所あるを見るべからず、世にムラピエフ氏及びマルテンス教授が目下の戦争を以



て海牙平和會議の趣旨と抵觸せずとなせる演説ばかり明白に、現時の演説なる思想傳播術が如何に曲學阿世的にして、又今日の人類が如何に合理なる思索の能力を欠けるかを、示せるものはなし、今日人の思想及び言語は人間活動の指導者として用ひらるゝに非ずして、唯罪惡回護の用にのみ供せらる、前の英杜戦争今日日露戦争之を證して餘りあり、今や如何なる非戦説と雖も其説いて効なきこと、左ながら相戦へる兩個の餓狗に向つて、快辯を振つて寧ろ其争ふ所の肉を兩分すべきを説き、之が爲に相殘害せんは徒に第三者を利するに止まるべきを教ふるが如し、

今や我等は峻崖に突進せり、止まるべからず、崖端早く既に一步の中に在り、  
 身苟も多少の道理を解する者、人類今日の地位を憶ひ其向つて近づく所の何れなるかを考ふれば、明かに現地位の到底脱するに道なきと、及人類を必然將來來らんとする亡滅の境より救ひ出すべき組織方法の到底案出すべからざることを悟得せざる能はず、  
 現今次第に複雑を加へ來れる經濟上の問題は姑く措くとするも、今日盛に兵備を競ひ何時にても戦端を開かんとする列國の關係は、到底全文明國人を驅つて破壊滅亡の地に



赴かしめずんば已まざる也。

然らば則ち之を如何にすべき乎。

### 第六章

今を距ること凡そ二千年前、パプテスマの約翰と基督とは人に説いて曰く「期は満てり神の國は近づけり爾曹悔改めて福音を信ぜよ」馬可傳一章十五節と、又曰く「爾等悔改めず皆同じく亡ぼさるべし」路可傳十三章五節と、而かも人は其の説く所を聞かざりき、而して其豫言したる亡滅は今や正に近づけり、我等は之を見ざらんと欲するも得ず、我等は今將に亡びんとす、此故に我等は時に於ては舊く我等に取りては新しき救世の手段を顧みざること能はざる也、我等は我が不正不法なる生活より生ずる諸他の災厄を措くも、戦



争の準備及必然之より生ずべき戦闘なるものゝみが、必ず  
 優に我等を滅亡せしむべきとを疑はず、我等は此の惨害を  
 脱せん爲に人の案出せる一切の手段の無効なること、及相  
 互に武備を競へる列國の不幸なる地位が、此後間斷なく進  
 行すべきことを疑はず、故に前掲基督の言は如何なる時如  
 何なる人に對してよりも、特に我等及我等の時代に對して  
 的切なるを見る。

基督曰く「悔改めよ」と、是れ一切の人をして姑く其従ふ所の  
 職を中止して、己に向つて己は何物なる乎、己は何處より來  
 れる乎、又己の向ふ所は如何なる乎を問はしめ、此等の諸問

題に答へたる後、其答ふる所の如何に依りて、己の現に爲せ  
 る所が果して己の向ふべき所に合致せるものなるか否か  
 を決せしめんとする意也、我等と世界を同うし時代を同う  
 せる者は、孰も皆基督教の神髓の何たるかを知れるが故に、  
 姑く自己の業を中止して沈思黙考すると僅かに一分間に  
 して、吾等は能く己が帝王たり兵卒たり大臣たり新聞記者  
 たる世俗の資格を抛却し、眞面目に自ら己の何物なる乎、其  
 向ふ所は如何なる乎の問題を究め、而して初めて己が行ふ  
 所の無用にして不法にして不道理なるを知ることを得べ  
 し、當代の人、當代の基督教國の人は自ら、己が帝王たり兵卒



たり大臣たり新聞記者たるに先だち己は一個の人間なることを思はざるべからず、詳かに言へば己は神意に依りて時間空間の無限なる此宇宙の中に生れ、少時此處に留まれる後は直に死滅し消失すべき一個の有機體に過ぎざることを思はざるべからず、故に我れ自ら我が前に置き、或は他人に依りて我が前に置かれたる、個人的社會的乃至全世界的なる、一切の人間の目的の如きは、之を我生の須臾と宇宙の無限とに鑑みれば、誠に言ふにしも足らざる小事にして、之を我等が生を此宇宙に享けたる所以の高上なる大目的に比すれば、遙に其下位に列せしめざるべからざる者なる

とを思はざるべからず、此至極の大目的は我等有限の凡夫が容易に近づき得べき所に非ずと雖も、而も其は確實に現存せるなり、而して我が爲すべき所は實に之が器械として働くに在り、換言すれば我等の目的は神の職工となりて神の事業の大成を助くるに存するを思はざるべからず、斯の如く思ひ來らば、上は帝王より下は兵卒に至るまで、現時代現世界に在る者は何人も己が今現に負へる義務、及他が己をして負はしめたる義務なる者を視ること、必ず前日と相異なる所あるべし。

帝王たる者も亦思はざるべからず、『己が帝冠を戴く前、己が



國家の首長たる義務を遂行せんとする前、己をして生を此土に享けしめたる神意の要求せる所を履行すべき約束を(己が現に此世に生存すてふ事實其物に依りて)結びたり、此要求は當に自ら知れる所なるのみならず、又其良心の感得せる所、此要求は我が信ずと稱せる基督教の教義に於て明示せられたるが如く、能く神の意に遵ひ神の求むる所を行ひ、能く我隣人を愛し隣人の爲めに盡し、他が己に施さんとなすを欲する底を己亦他に施さんとなすべき所に在り、我今果して之を行ひつゝある乎、願れば我は却て今人類を統御し暴力酷刑及慘の慘たる戦争を他に命じつゝあるあり、人は我

に向つて之を爲さざるべからずといふ、左れども神は我に向つて之れと異なる或物をなさざるべからずといふ也、左ればたとひ人が我に向つて國家の首長として暴力、苛税、酷刑、及戦争、換言すれば隣人殺戮を指揮せざるべからずといふとも、我は斷然之をなさんと欲せず、又なすと能はざる也』と、

是れ豈に獨り帝王の思はざるべからざる所のみならんや、人を殺せよとの命を受けたる兵卒、戦争準備を己の義務と心得たる大臣、戦争を挑發したる新聞記者、其他苟も己は何物なる乎、其向ふべき所は何處なるかの問題に接着したる



者は、盡く皆以上の如く反省せずんばあるべからず、斯くして若し國家の首長たる者戦争指揮を已め、兵卒たる者戦争参加を已め、大臣たる者戦争準備を已め、新聞記者たる者戦争教唆を已めんには、たとひ新制度を興さず、諸手段を講ぜず、權力平均なく、平和法廷なしと雖も、人類が今日戦争の爲のみならず又自ら招ける諸他の災禍の爲に沈淪せる究境、絶望の状態を破棄し去るを得ん也。

言少しく奇なるが如しと雖も、今日人をして諸種自業自得の災害及惨中の惨たる戦争より脱せしむべき最も有効確實の法は、決して一般の外的皮相の處置に存するにあらず、

之を得るの法は唯一千九百年前基督の説ける如く、單に各人の良心に訴へ、人をして自ら省みて己の何物なる乎、何故に生存する乎、何をなすべき乎、又なすべからざる乎を問はしむるに在るのみ。



今日世人の蒙れる害惡の由つて來る所以は實に人間行動の合理的指導を與ふべき者なきに在り、言ひ換ふれば宗教なきに在る也、余が此に宗教といふは徒に獨斷的教義を信仰し、若くは彼の一時の娛樂、苟安、奮興を與ふべき諸種の儀式の執行に隨喜するを謂ふに非ず、彼の神人の關係を確立し、隨つて人類の活動に對して一般高上なる指導を與へ、之なくんば人をして獸畜と伍せしめ又は之よりも下位に立たしむべき底の眞個の宗教を謂ふ也、今日人を導いて必然滅亡に向はしめんとせざる彼の害惡は、當今に於て殊に著し

く其暴威を振へり、是れ當今の人は其生涯に於ける一切の合理的指導を亡なひ、主として科學的智識の範圍に於ける發見改良に其精力を費し、其の結果自然の力を制すべき偉大なる能力を發達し得たりと雖も、而も此能力を合理的に應用すべき何等の指導者をも有せざるが故に、之をもて徒らに最も劣等なる動物的なる情慾を満足せしむるの用に供するに至れるは、自然の勢ひなれば也、夫れ宗教心なくして徒に自然の力を制すべき偉大の能力を有せる人は、猶小兒に火藥若くは爆發瓦斯を玩具として與へたるが如し、世人若し今の人類が有せる這個の能力と、



彼等が之を使用する方法如何を考察せば、而して更に翻つて彼等が道德的發達の程度如何を考察せば、必ずや今の人類が決して鐵道、蒸氣、電氣、電話、寫眞、無線電信を用ゆるの權利なきのみならず、製鐵、製鋼の如き單純なる技術を用ゆるの權利すらも之れ無きことを感ずるならん、見よ彼等は此等の改良及び技巧をもて、單に其肉慾、快樂、放蕩の爲めに、甚しきは即ち相互の破壊の爲めに使用しつゝあるに非ずや、

然らば則ち之を如何すべけんか、凡そ此等人生の改良を排斥し、凡て此人類が得たる力を抛擲すべき乎、即ち人類が既

に學べる所のものを忘却し去るべき乎、是到底行はるべきとに非ず、如何に此等人類の智力的所得が今害用せらるゝとも、兎に角にも既に得來れるもの、今更忘却し去るべきに非ず、然らば今日迄幾百年間成立し來れる列國の組織、その結合の方法を變改して別に新組織を立つべき乎、少數人の多數人を欺瞞し之を利用するを防拒する新制度を發明すべき乎、智識を廣く普及せしむべき乎、斯の如きは從來既に試みられ今日尙大熱心を以て試みらるゝ所、然れ共斯の如き改良の架空の方便は、唯是れ己を忘るゝの方便、人の注意を必然來るべき破滅の自覺以來に外れしめんとする方便



たるに過ず、夫れ國家の境域は變更すべし、制度は改正せらるべし、智識は普及せらるべし、然れども人類は、如何に他の境域、他の組織の中に在りて、如何に其智識を増進するも、若し彼等が宗教的自覺に依て指導せらるゝとなくして、單に感情、學說、外部の勢力に依て支配せらるゝの間は、彼等は依然として常に搏噬を試むるの野獸たり、若くば依然として奴隸たるを免れざる也。

人は孰れか一方に就かざる可らず、奴隸中の最も無慚暴慢なる者の奴隸たるか、又は神の從僕たるか、之のみ、何となれば人の自由なるべき唯一の方法は己の意思と神の意思と

を結合するに在るのみなればなり、而も人は宗教を失へり、或者は宗教其物を排斥せり、或者は外部の奇怪なる儀式を目して直ちに宗教なりと爲せり、而して唯だ肉慾、恐怖、人爲的法律、就中相互の催眠術に依て指導せられて、動物若くば奴隸の境を脱する能はざる也、然り、外部の盡力は決して彼等を救ふ能はず、人を自由となすものは唯だ宗教あるのみ、而も現時代の多數人類は、之を喪失せる也。



然れども今既に人生の實務によりて種々なる先入の見を有する者は言はん「我等が今日蒙れる所の害惡を廢滅せんには、啻に少數の人のみならず人類全體擧つて悔改せざる可らず、即ち神意の遂行と人類相助の旨を以て己が生涯の目的なりと了解せざるべからず、是れ果して行はるべきとなる乎」と、余は之に對して答ふらく「是れ啻に行はるべきとなるのみならず、此事の行はれざらんと反つて不可能也」と、夫れ人は自ら省慮せざらんとするも得ざる者、各人は自己に向つて、己は何物なる乎、何の爲に生活せるかを問はざる

能はざる者也、蓋し人は理性を具ふる者なるが故に、何故に己の生活せるかを窮めんとせずして一日も生存するを得ず、又此問題は常に自ら問へる所にして、且つ常に其人々發達の程度に應じて、彼が受けたる宗教的智識を以て之に答ふる者なればなり、當今世人が自ら感ぜる内心の矛盾の爲めに、殊に強く此問題を提起し以て其答を求むること益痛切なり、而して當今の人が此の問題に答ふる道唯だ一あるのみ、即ち人類相愛し相奉仕すべき人生の法則を承認すること、是のみ、こは是れ今日人生の意義に關する唯一の合理的答案にして、而かも此答案は一千九百年前基督教中に唱



道せられ、均しく人類の多數に知れ渡りたる所也。  
 以上の答案は人心の奥底に伏在し、現時基督教世界一般の  
 心裏に存する所なりと雖も、唯公に之を表明して我生の指  
 導となすとなし、是れ一面には最大教權を享有する所謂科  
 學者なる者が、宗教を以て人類發達の途中に於ける一時的  
 の階段にして、既に時代後れの殘物たるに過ぎずとなし、人  
 間は宗教なくして優に生存し得べしとの雜駁なる誤想を  
 抱き、今漸く教育を受け初めんとする愚民に對して此誤想  
 を傳ふると、又他の一面には所謂今の權力者が、教會の信條  
 は即ち基督教なりとの誤謬を有するが故に、或は故意に、或

は無意に、淺薄極まる迷信をば、是れ即ち基督教なりとして、  
 盛んに人民の間に支持獎勵せんことを勉むるに依れり、  
 若し此二個の誤想にして全然破滅せらるゝに至らば、茲に  
 初めて久しく現代人心の奥底に潜める眞個の宗教が明か  
 に發揮來り、又人心を支配し得るに至るべし、  
 能く斯の如きに至らしめんとせば、一方に於ては今の學者  
 なる者をして、人類同胞の主義と己れの欲せざる所を人に  
 施すべからざる法則とは、他の思慮分別に服すべき人間の  
 諸學說より偶然に出でたる思想の一に非ずして、高く他の  
 思想の上に立ち、永遠無窮なる神と人類との不變の關係よ



り流れ出づる大主義たり、宗教たり、全宗教たり、随つて常に人の身心を支配すべき者たるを解せしめざるべからず、又他の一方に於ては、故意或は無意に基督教の假面の下に非文明なる迷信を説ける者をして、彼等が支持し説法する所の凡て彼の教條、禮典、及儀式等は、雷に彼等が考ふる如き無害の者ならざるのみならず、却て神意を遂行し人々相奉仕するに於て顯はれ來るべき宗教的真理の中樞點を他に知らしめざらんとする極めて有害の者たること、及び己の欲する所之を人に施せてふ法則は、雷に基督教が命ずる所の一なるのみならず、又實際福音書中に説けるが如く、實

行的宗教の全部なるを知らしめざるべからず、若し人をして一齊に人生の意義を自問せしめ、而して一齊に之に答へしめんと欲せば、それは決して難事にあらず、識者を以て自ら任ずる人士をして、宗教は舊性の還元にして野蠻時代の遺物なりと考へ、且つ之を年少子弟に説くを止めしめ、又人をして善良なる生涯を送らしめんが爲めには、只だ教育を普及せしむれば足れり(即ち種々多様の智識を普及せしむれば、人は其何れかによりて正義と道德的生活とに導かるべし)と考ふるを止めしむるを以て足れりとなす、而して其代りに彼等をして、宗教が人間の善良なる生活に



必須欠く可らざる者なるを知らしめ、又其宗教が既に今人の意識中に存在し活動せるを悟らしめざる可らず、而して又故意に或は無意に教會の迷信を以て人民を混亂しつゝ、ある人々をして、直ちに之を止めしめ、基督教に於て重要喫緊とする所の者は、洗禮にもあらず、晚餐にもあらず、信條の宣言にもあらず、只神を愛し、隣人を愛し、己れの欲する所之を人に施すの命を履行するに在るを知らしめ、一切の律法、一切の預言、悉く此中に在るを認識せしめざる可らず、若し夫れ似而非基督教徒及び科學者にして十分に之を理解し、彼等が今其の複雑なる、混亂せる、而して不必要なる理

論を説くが如く、此の單純なる明白なる、而して必要なる真理を、兒童と無教育者とに向つて説くに至らば、世人は皆一齊に其生活の意義を理解し、其意義より流出する純一の義務を認識するに至るべし、



然れども人或は問はん、我等露國の中に住し今日の時に處して即今先づ之を如何すべきか、敵既に我等を撃ち我等が民を殺し我等を脅かせる時、露國の兵卒たり士官たり將官たり皇帝たり私人たる者の行ふべき所は則ち如何、我等は我敵が我領土を破壊し、我勢力の生産を掠奪し、我が民を捕獲又は殺戮するに任すべき乎、斯の如き事の既に開始せられたる今日我等は何を爲すべき乎と、

されども戦争の事業が開始せらるゝに先だち何人が之を開始したりとするも、又其他何事の開始せらるゝにも先だ

ちて、我生の事業の之よりも前に開始せられ居るとは、苟くも分別ある者の知らざるべからざる所也、而して我生の事業なるものは彼の旅順に對する支那人、日本人、若くは露國人の權利の承認と何等關聯する所あるなし、我生の事業は我を此世に送りたる神の意を遂行するに在り、此神意は我の初めより知れる所、此神意は我の善く我隣人を愛し我隣人に仕ふべき所に在り、然らば則ち我は如何ぞ一時的なる偶然なる不法なる而かも暴逆なる要求に遵ひて、我生の永久不變の法則に違背すべけんや、若世に神ありとせば彼は我が死する時、我は何時死せんも知るべからず、我に向つて、



我果して鎮南浦を其貯藏材木と共に保有せるか、又は旅順を保有せるか、又は彼の羅西亞帝國なる一結合體を保有せるか否やを問はざるべし、そは初より彼が我に委託したる所に非ざればなり、されとも彼は必ず我に問はん、我は神の賦與せる我生命を以て何をなしたる乎、我は之を當初より定められたる目的の爲に使用し、又之を我に託するに當りて課し給へる條件を充實せんが爲に使用したる乎、略言すれば我は果して神の法則を遵守したるか、と、此の故に戦争が既に開始せられたる今日何をなすべき乎の問題に對し、余の如き天命を解せる者に取りては、余が如

何なる地位に立てるかを問はず、又余が如何なる事情の下に在かを問はず、余の答ふべき所は、幾千の日露兩國人が殺さるとも、又雷に旅順のみならず聖彼得堡及び莫斯科まで略取せらるゝとも、余は唯神の求むる所の外を行ふと能はず、随つて余は一個の人として、直接にも間接にも、又指揮すると幫助すると教唆するとに論なく、余は一切戦争なるものに關與すると能はず、余は之を爲すと能はず、爲さんとなし欲せず、又爲さずといふの外あるべからず、余が神意に反せる所を行ふを中止したるが爲め、立どころに若くは少時の後に、余が身に起るべきとの何たるべきかは、余の知りもせ



ず、又知る能はざる所なりと雖も、余は神意を遂行するより生ずる所は、必ず余に取り、又人類全體に取りて善良なるものに過ぎざるを疑ふこと能はず、

人動もすれば寒心すらく、若し我等露國人にして今日直に戦ひを止めて、日本人の我等に求むる所に屈從せば其結果果して如何なるべきかと、

然れども若し吾人が吾人の隣人を愛し、隣人の爲めに盡す可きと、是れ何人も反對し得ざる所を要求せる真正の宗教を人類の間に確立するを以て、果して人間の墮落滅亡を救ふべき唯一の方法なりとせば、即ち一切の戦争や、交戦の刻

一刻や、及び我が之に參與するとは、皆な唯だ此救ひの實現をして益々困難に且つ遼遠ならしむるものに非ずや、

此故にたとひ人が其豫想の結果に依て己の行動を決するが如き不確實なる立脚地の上に立つとするも、尙露國が此際日本人の要求する一切に對して讓歩し屈從することは、啻に破壊殺戮の中止より生ずる明白なる利益あるのみならず、是れ實に人類を其破滅より救ふ唯一手段の實現を速かならしむるの大利あるものなり、之れに反して戦争の繼續は其の終局の如何に拘はらず、唯だ此の救世の唯一手段を遷延せしむるに過ぎざる也、



論者或は言はん、果して斯くの如しとするも、戦争は唯一切の人類又は其多數が、盡く之に参加するを拒める時に於てのみ廢棄せらるべし、彼の露國皇帝にもあれ一兵卒にもあれ、僅に一人の之を拒むが如きは是れ唯何人をも利すことなくして、徒らに我生命を破滅するに過ぎず、思へ露國皇帝其人と雖も若し今日戦争を中止せんとすることあらん乎、彼は直ちに廢位せられ、若くは弑殺せらるゝに至らん、若し普通人にして兵役を拒まば彼は直ちに囚徒隊に送られて恐らくは銃殺せられん、然らば則ち人は些少の用をもなさずして社會を利すべき其生命を抛ち去るものにあらざ

る乎と、是未だ曾て思を人生の歸趣に注かず、又之を解せる者の一般に疑ふ所也。

然れどもこは是れ人生の歸趣を解せる者、即ち宗教を有する者の語り又は感ずる所に非ず、斯くの如き人は自己の行動を、其行動の豫想せる結果によりて指導せず、其生命の歸趣の自覺によりて指導するなり、夫れ勞働者の工場に至るや、其の己に課せられたる職を執るのみにして、絶えて其勞力の結果に就て考ふる所なし、兵士の上官の命を行ふこと亦之と同じ、宗教家が神の命せる職務を勤めて其の成行に頓着せざること亦實に斯の如し、此故に宗教家に取りて



は、己れと同じき行動に出づる者の多かるべきか、將た少かるべきか、又彼が爲すべき所を爲すに於て、如何なる事の彼が一身に起り來るべきやは、彼れの決して問ふ所にあらざる也、彼は生死の外に一物の起るなく、生死は己れの服従する神の手中に存するを知れり、

宗教家の行動が右の如にして、其外に出でざるは、彼が斯く行はんとを希ふが爲に非ず、斯くせんは己及他人に利あるが故に、非ず、唯己の生命は神の御手に存することを信じて、右の如く行動するの外他に途なきを以てなり、

宗教家の活動の他に異なる所以此に在り、故に人が其自業自得の災害より脱せんは、其生涯に於て利害又は議論に左右せられず、其宗教的悟得によりて指導せらるゝ所に在るのみ、



『然れども茲に敵あり來つて我を襲撃せば則ち奈何』  
『汝の敵を愛せよ、然らば汝には一人の敵も無かるべし』とは  
基督が其十二使徒に對して教へたる言葉なりとす、此答へ  
は決して單なる言葉にあらず、夫の愛敵の誠命を以て誇張  
なる一箇の過言に適きずと傲し、其の確的に言明する所ろ  
以外に、或る他の意義を之に附會せんとする習慣に陥りた  
る者は、或は之を以て唯の言葉に過きずとなすと有らんも、  
其實此の答たるや眞個に明晰確的なる活動と其影響とを  
指示する所の斷言たるなり、

抑も敵を愛するとは何ぞや、愚昧なる邦人等が力を盡して  
我邦人民の憎惡心を挑發せんと努めつゝある所の、かの日  
本人、支那人及び總ての黄色人種を愛するとは、曾て英國人  
の爲せしが如く、亞片を以て彼等を毒殺するの權利を得ん  
が爲めに、彼等と戦ひて之を殺戮するの謂にはあらず、露獨  
佛の國民が常に爲す如く、東洋の國土を攫取せんが爲めに  
彼等を虐殺するの謂にはあらず、又わが露國人の爲せるが  
如く、鐵道破壊の刑罰として或は之を土中に生埋めにし、或  
は辨髪を以て之を珠子繫ぎにし、或は之を黒龍江中に沈溺  
せしむるの謂にはあらず。



『弟子は其師に勝ること能はず……弟子は其師の如くならば足りぬべし』

我等が敵と呼ぶ所の黄色人を愛するとは、所謂基督教の名の下に、人間の墮落、贖罪、復活等の種々なる荒唐無稽なる迷信の箇條を彼等に教ゆるの意に非ず、又如何にして他人を欺罔し之を殺害すべきかの技術を彼等に教授するの意に非ず、眞個に彼等を愛するとは彼等に教ゆるに正義、無私、同情、博愛を以てし、且つ之を教ゆるに單に口舌を以てせずして、我等自身の善且つ義なる生活の模範を以てするに在り。敢て問ふ、我等は果して何事を彼等に爲したりし乎、又現に

何事を爲しつゝある乎。

若し夫れ我等にして眞に我が敵を愛せしならんか、又今に於ても日本人たる我敵を愛し始むるとせんか、我等は斷じて一箇の敵をも有せざるなるべし。

是が故に夫の軍事的計畫や、其の準備や、外交上の畫策や、行政財政經濟上の方策や、革命的社會主義的の傳播法や、其他の無要なる各種の學術やに其身を没却して、依つて以て人世の災厄より人類を救濟せんと欲するの輩に取りては、或は奇異の感なきにあらざるべしと雖も、元來人類の救濟なるものは、獨り戦争の災厄のみならず、自ら招ける一切の災



厄に關しても、決して夫の平和同盟を締結する帝王等の力によりて生すべきに非ず、又夫の權まゝに帝王を廢立し憲法を制定して之を制限束縛し、若くは帝政に代ふるに共和政體を以てする人々によりて來るべきに非ず、又夫の平和會議、社會主義的計畫の實行、海陸軍の勝敗、圖書館もしくは大學校、及びかの學術と名けられたる無要無益なる心的活動によりて來るべきにあらず、唯だ夫の露國に於けるチュッコホルス、ドロツヂン、オルコヰクの徒の如き、奥國に於けるナザリونس、佛國に於けるコンダシエ、和蘭に於けるテルヴェーの如き、其他一切自家行動の目的を人生の外

形的變化の如何に措かずして、唯だ只管に己を此世に遣はし給へる神の聖旨を最も忠實に成就せんことを以て畢生の目的とする、此等の單純善良なる人々の數の増加によりてのみ、眞個の救済は實現せらるゝ也、只だ天國を彼等自身の裏に其の靈魂の中に實現せる此種の人々のみ、直接に之れが目的を有する事なくとも、其一言一行は知らず識らず、萬人の渴望して措かざる外形上の天國をも世上に建設するの結果を奏する者なり、然り救済は只だ此一方法に於てのみ存す、亦他の方法あるなし、故に夫の人民を支配し、宗教的及び愛國的迷信を以て



煽動し、排外心、憎惡心、及び殺戮心を人民の衷に鼓舞する輩の所爲の如き、又かの人民を奴隸の境涯、壓制の状態より救はんと欲して、激烈なる外形的の革命を彼等の中に挑發せんとする輩の行動の如き、或は又かの大部分全く不必要なる該博の現世的智識を習得すれば、人は自然に善良の生活を送るを得べしと思惟する輩の行爲の如き、總べて是れ人の眞實要求する所のものを、反つて其人より奪ひ去りて、只だ人をして一層遠く救済の道より隔離せしむるもののみ。現今基督教世界の人々が苦しむつゝある一切災害の根據は、要するに彼等が今に於て宗教を失ひたるの點に存す。

或人々は、現在の宗教と今の人心發達の程度及び學術の進歩との間に存する不調和を見て、宗教は一般に不必要なるものなりと斷定するに至れり、彼等は實に自ら宗教なくして生活し、且つ如何なる宗教も全然無用の長物なりと説きつゝあり、而して又一方に於ては、現在説かれつゝある夫の變形退化せる基督教を奉して、何等人心を嚮導するの力なき空虚にして極めて外形的なる儀式を守りつゝ、前者と同じく宗教なくして生活するもの比々皆な然らざるはなし、夫れ然り、然りと雖も現代の要求に應ずべき一宗教は儼然として存し、且つ普ねく衆人に知られ、隱然基督教的世界の



人心を指導して其中に活躍せり、故に此宗教をして萬民の前に明かならしめ、萬民をして之に依て立たしめんと欲せば、其必然の前提として、只だかの民衆の指導者たる教育ある人士をして、宗教の人間に欠く可らざる事、宗教なくば人は善良なる生涯を送る能はざる事、及び今の所謂科學なるものは到底宗教に代り得る者にあらざる事を悟らしむるを要するのみ、而して又た夫の權勢の位地に立ちて舊宗教の形骸を支持するに汲々たる人々をして、彼等が宗教の形式の下に支持說法する所の物は、其實宗教に非るのみならず、人の眞宗教を奉ずるを妨る大障害物たる事を悟らしめ

ざる可らず、而して此眞宗教こそ既に彼等の熟知する如く唯だ能く人生の有らゆる災厄を救濟するに足る者なる事を合點せしめざる可らず、斯くて必竟人生救濟の唯一の方法は、既に人の意識中に活躍として存する眞個の宗教を攝取して、之を自己の物となすに妨害となるべき一切の行爲を中止するの一點に在りて存するを見んのみ。



## 第十一章

余は前章を書き終りし時、忽ちにして飛報あり、曰く旅順港外に於て六百の無辜なる生命は殺されたりと謂ふに此六百の不幸にして愚昧なる人々の無益にして悲惨なる最後を遂げたるの一事は、以て此破滅の原因たりし人々の迷夢を醒ますに於て餘師あらんのみ、而かも余の斯く云ふ所以は、マカロフ其他士官等の爲めにあらず、彼等は自己が何事を爲しつゝあるか、又何の爲めに働きつゝあるかを熟知し、虚偽なる愛國心の假面を蒙りて、此虚偽の罪惡視せられざる所以は、只だ餘りに一般に行はるゝが故のみ、自己の利益

の爲めに自己の野心の爲めに自ら進んで此事に當りたるに非ずや、去れば余は寧ろ露國の各方面より召集されたる彼等可憐の兵士の爲めに云ふなり、彼等は豈に宗教的譎詐と刑罰の恐れとに依りて、其正直にして道理ある、有益にして勤勉なる家族の生活より引き離され、世界の一隅に逐ひやられ、慘酷無情なる殺人器械の上に載せられ、其の慘憺たる困苦、忍耐、努力、及び最後に彼等の上に臨み來れる死其物に依りても、何等の利益を擧ぐることなく、又た何等の必要をも充たすことなく、無殘々々と粉壺せられて其の無意味なる殺人具と共に遙かの海中に沈溺せるに非ずや。



千八百三十年、波蘭戦争の時、クロピツキ、將軍の命を奉じて、聖彼得ス堡に赴ける副官ピリジンスキは、露將ダイビツチとの佛語の會談中、露國軍隊を波蘭に入らしめざる可らずとのダイヒツチの要求に對して答へて曰はく

『大將閣下、果して然らば波蘭國民は到底此勅命を受理すること能はざるべし』

『余を信ぜよ、皇帝は之より一步も譲らざるべし』

『然らば余は恐る我等は已むを得ず戦ふの外なからん、多くの血は爲めに爲され、多くの不幸なる犠牲は供せられん』

『爾かく憂慮する勿れ、双方を合して一萬の死者を出さば足らん、只だ夫れのみ』

とは是れダイヒツチが其獨逸訛りの言葉を以て答へたる所なりき、而して其時の彼れの口調は、恰かも彼れ及び彼れと同じく殘忍酷薄なる他の一人即ち露帝ニコラス第一世とが、或は一萬或は十萬の露人及び波蘭人に對して絶對的なる生殺の權を有する者の如くなりき、

〔附記〕此時テ將軍は、此波蘭戦争に於て六萬人以上の露國兵が敵の砲火よりも寧ろ疾病によりて斃れ、而かも將軍自らも亦た其中の一人たらんとは、流石に豫期せざりし



嗚呼、是等數人の意志によりて、家族の維持者たる六萬の人々が其の生命を棄てたりとは、餘りに馬鹿らしく又餘りに怖ろしく、何人も容易に信ずること能はざる所なるべし、而かも奈何せん、そは實に起りし所の事實なり、而して今や又も同一の事は起りつゝあり、  
若し夫れ日本人を滿洲に入らしめず、又之を朝鮮より逐ひ出さんが爲めには、僅か一萬人は愚か、少くとも五萬以上の生命を要すると明かなり、余は果してニコラス二世やクロバトキンが、曾てデイピッチの言ひし如く『露國側のみにて

只だ五萬人を殺せば足れり、然り只だ是れのみ、是のみ』と語りしや否やを知らず、而かも彼等の現に爲しつゝある所は明かに之を立證するが故に、彼等が爾かく考へつゝあり、又た考へ居らざるべからざるは、掩ふ可らざるの事實なり、かくて眩惑されたる不幸の露國農民の數千、又た數千は、滔々として日夜極東の地に注流されつゝあり、是等は即ちニコラス、ロマノフ及アレキス、クロバトキンが支那朝鮮に於て行はるゝ惡事掠奪醜行の一切を遂行し援助せんが爲めに之を殺さんと決したる其の五萬の生靈にあらずや、而して今や宮殿に安居する彼等不道德なる野心家は、彼等の野心



の満足の爲めに犠牲に供せらるゝ此等五萬の不幸なる露國勞働者の死によりて、新しき榮譽と新しき利益とを待期しつゝあるに係らず、其の可憐の勞働者自身に至りては何等の罪もなくして空しく屠られ、又其の苦痛と死とに依りて更に何物をも利益する所なきなり、

露國人が何等の權利をも有せざる他國民の土地、元來其の正當なる所有者より無法に掠奪したる、而して實は露國人に對してすら何等の必要もなき土地の爲めに、又かの朝鮮の森林より暴利を攫取せんと計畫せる或投機師の曖昧なる事業の爲めに、露國人民全體の粒々辛苦の勞働の結果た

る數百千萬の財寶は消費せらる、而して次代の人民は堪へ難き負債に縛られ、其最良の勞働者は其職より奪ひ去られ、數千萬の子弟は無慈悲にも死地に陥れらる、斯の如き不幸なる破滅は今や既に初まれり、而して雷に初まれるのみならず、此戰爭の當事者は甚しき怠慢と不注意とを極め、何等の準備も整はず、又た全く待期せられざる幾多の事實は續發して、失敗又た失敗、終に一新聞紙をして、今や露國の成功すべき重なる機會は、無盡藏なる人間てふ材料を有するの一事に在りと云はしむるに至れり、果然彼等が數十萬の露國人を遠慮なく死地に送り出すは、實に全く此種の思想に



基くものなり、亦甚しからずや、

今や我邦海軍の悲しむべき失敗の無念を、陸軍の勝利に於て晴さざる可らずとは皆人の公言する所なり、是れ抑も何の意味ぞや、明白なる言語を以て之を云へば、若しも當事者にして海上の措置を誤り、其の過失の故を以て數百萬の國帑と數千人の生命とを破滅せしめたりとすれば、吾人は今後陸上の戦闘に於て更に數萬の死者を出すによりて之を償ひ得べしと云ふに等し、亦奇ならずや、

かの群蝗の一團が川を渡るに際して、其下層の者既に先づ溺れ、其屍體を以て一種の橋を作り、上層の者をして之を越

えて渡らしむる事あるが如く、露國人民も亦正さに斯の如きの運命に陥りつゝあるなり、看よ露國最下層の人民は既に溺れ初めたり、彼等は豈に後より來りて同じ運命に終るべき他の數千人の爲めに其道を開きつゝある者に非ずや、敢て問ふ、此極惡非道なる怖ろしき事業の張本人、指揮者、擁護者たる者は、今や少しく自己の罪惡犯行を理解するに至りし乎、曰く否々、彼等は反つて自己の義務を盡したりと信じ、又た現に盡しつゝありと信じて、得々として自己の所行を誇りつゝあるなり、

人民は皆な勇敢なるマガロフの死を語れり、彼が人を殺す



に妙を得たるとは何人も異議なき所なり、人民は又た數百萬留を價したる精巧なる殺人器の沈没を傷めり、彼等は又如何にして彼の憐むべき愚漢マカロフにも劣らざる他の虐殺者を得んかと論評し、又た新たに一層有力なる殺人具を發明せんとす、而して上は露國皇帝より下は最下級の新聞記者に至るまで、此極惡事業に關係せる凡ての惡人等は、同胞人類に對する暴虐と憎惡とを増加せんが爲めに、異口同音、新しき狂氣と新しき残忍とを鼓吹し、絶叫し居るなり、かくてノヴォオヴレミヤ新聞は記して曰く、『マカロフは決して露國に於ける唯一の人物にあらず、何れの提督と雖も一

たび其位地に立つに於ては、必ずや彼れの跡に倣ひて、名譽の戦死を遂げたる彼れマカロフの計畫と意見とを繼續すべし』と、

聖彼得斯堡のヴァイエドモスチ新聞は曰く、『吾人をして、神聖なる祖國の爲めに其生命を棄てたる人々の爲めに、熱心に神に祈らしめよ、彼等は此祖國が將來の戦闘の爲めに等しく勇敢有徳なる新子孫を産して、此大功業の名譽ある完成の爲めに永久の不盡藏たらしむるを信じて、片時も疑ふと無かりし者なり』と、

ルス新聞は曰く、『一個の老熟發達せる國民が、如何に前代未



聞の大敗北を招くとも、其敗北より學ぶべき結論は唯だ一のみ、即ち其戦争を飽まで繼續し、發展し、且つ之を完結せざる可らずと云ふ結論是れのみ、果して然らば吾人をして更らに新なる氣力を喚起せしめよ、かくて新精神を有する新英雄は起り來らん」と、其他諸新聞の論調皆な之に類せり、斯くて一層の暴威を以て殺戮と各種の犯罪とは進行するなり、人民は是等兵勇の軍事的精神の發揮を見て、或は不意に同胞五十人の敵に出會して、悉く之を殺したりと云ふが如き、或は一村を占領して悉く其住民を屠りたりと云ふが如き、或は又間牒と目せらるゝ人物を捕へて之を絞殺した

りと云ふが如きを見て、熱心に之を稱讚し居るなり、但し間牒なる者は已むを得ざる必要物なりと認められて、我方に於ても正に同様の事を爲し居るなり、而して是等凡ての悪事は誇大なる電文を以て一々總指揮官たる露帝に報告せられ、露帝は又更に斯の如きの行爲を繼續すべきを獎勵して、其忠勇なる軍隊の祝福を電送す、

嗚呼、既に斯くの如きの場合に於て、若し茲に之れが救濟の道ありとなれば、そは唯だ以下の基督の教のみなることを火を賭るよりも明かなるに非ずや、

基督曰く『爾曹先づ汝等の衷に在る神の國と其正義とを求



めよ、然らば其他一切の物(即ち人の渴仰して措かざる一切の世間的幸福)は、おのづから實現せらるべし』と、是れ實に人生の法則なり、即ち世間的の幸福は人が争ふて此世間的幸福を追求する時に得らるべき者にあらず、蓋し斯の如きの努力は却つて人をして其の求むる所の物より隔離せしむるを以て普通となす、之に反して、人もし世間的幸福を得ん事を思ふことなく、只専心神の前に、自己生命の根源と法則との前に、其自ら正義なりと信する所を最も完全に成就せんが爲めに、大膽に之を決行するとありとすれば、其時——然り只だ其時に於てのみ、偶ま世間的幸福も亦た

實際此世に實現せらるゝ者なり、

是に於てか知る、人生眞個の救済は唯だ一あるのみ、何ぞや他なし、各個人が自己の衷に神の聖旨を成就するの一途是れなり、即ち此宇宙に於て僅かに我力に任すべきは、各々其分に應じて己が一身を處するの點に存するに非ずや、各個人に取りて唯一無二なる人生の目的は實に是に存す、同時に又各個人が他を感化し得べき唯一の方法は實に是に存す、嗚呼然り各人一切の努力は實に只此一事に向つて傾注せらるべき者也、

千九百四年五月二日



第十二章

100

余が此論文の最後のページを發送し了りし時、安んぞ圖らん余は又た更らに恐るべき一個の新報に接せんとは、そは彼の軍隊統率の權力を有せりと自任する、名勢利達を渴望する輕佻浮華の徒が、新たに又露國人民に對して行へる暴虐無道の報知なり、又もや彼の燦爛たる諸種の服裝を纏ひつゝ、陋劣卑屈なる奴隸中の奴隸——即ち自家の功名に汲々として折りもあらば其同僚を陥れんと謀り、又かの兒戯に類せる華奢なる服裝の上に、更らに一個の燦爛たる勳章又は紫綬を加へんと熱望し、若くは又た自己の無能と怠慢

224509

に對して更らに無責任なる幾多の將校——是等の憫笑すべく、價値なき人物は、又もや茲に彼等を養へる彼の尊敬すべき親切なる勤勉なる勞働者の數千人を、慘憺たる痛苦の間に滅亡せしめたるなり、而して又も是等の暴虐無道は、啻に毫も其責任者を反省悔悟せしめざるのみならず、却つて彼等をして或は口に或は筆に、更らに多數の日露兩國民を戕害殺戮し、更に多數の家族を零落せしむるの緊要急務なるを唱導せしむるに至る、

啻に之のみならず、是等罪惡の執行者等は、更に益々此種の非道に對して人々を準備せしめんが爲めに、何人に

101



も明白なる事實(即ち單に愛國的軍事的見地よりしても今回の事件が露國人の失敗たるに相違なし)を曲屁し、自己の責任を隠蔽しつゝ、頻りに愚昧なる人民を欺きて(かの宛然屠獸場に誘致さるゝ家畜の如くに死地に臨ませられ、單に一將官が他の一將官の言を誤解せるが如き些々たる理由の結果として、立ろに其數千人は戕害殺戮せられたる)夫の不幸極まる露國の労働者の行爲は、天晴れ武勇の至りなりなど、稱賛激賞し、以て質朴なる彼等愚民の虚榮心を挑發せんと努めつゝあるなり、而かも奚んぞ知らん、彼等可憐の兵卒は單に遁走する能はざりしが故に無殘にも殺害せら

れ、遁走するの機會を得たる者は幸にして生還するを得たりしに過ぎずして、其間何等の賞讃を價する者之れなき事を、而して更に又た海陸將官の肩書に誇れる是等敗徳殘忍の將軍の一人が平和的なる日本人の一群を沈溺せしめ得たりとの一事の如きは、全露國民の慶賀して措かざる一大名譽の武勳として嘖々賞讃されつゝあり、斯くて露國の各新聞は一齊に左の如き殺人獎勵の忌はしき文字を掲載す。

『鴨綠江畔に死せる二千の露國兵士、破壊せられたるレト  
 ギザン及び其姉妹艦沈没されたる我水雷艇、是等は豈に我が全艦隊に向つて、速かに夫の憎むべき日本海岸に奮進突



撃して、出來得る限りの慘害を加ふべきことを促かす者に  
 わらずや、日本は露國人の血を流さんが爲めに其軍隊を派  
 遣せるなり、彼等に對して寸毫も容赦すべきに非ず、今は人  
 情を顧みるの時に非ず、之れ寧ろ罪なり、吾人は唯だ戰はざ  
 る可らず、直ちに日本人の頭上に忘る可らざる大打撃を加  
 へて、以て永く彼等の肝膽を寒からしめざる可らず、今は我  
 巡洋艦が速かに洋上に猛進して日本の都邑を粉塵し、其灰  
 塵をして山水明媚なりと稱する其の海岸に飛散せしむべ  
 きの時なり、奚んぞ人情の忍びざる有らん邪』  
 一たび開始されたる怖ろしき事業は斯の如くにして繼續

せらるゝなり、掠奪、暴虐、殺戮、僞善、窃盜、就中最も恐るべき詐  
 僞——即ち基督教徒及び佛教徒兩つながら其宗教の教義  
 を曲解するの詐僞——は斯くの如くにして永く繼續せら  
 る。  
 之れが全責任者たる露皇帝は、斷へす兵士を檢閲して彼等  
 に感謝し、賞與し、且之を獎勵す、彼は又勅令を發して豫備兵  
 を召集す、彼れの忠良なる臣民は再三再四、其財産と生命と  
 を(其口舌のみにて)敬愛し奉る君主の足下に獻せんと揚言  
 す、而して又一面に於て、彼等臣僚は啻に口舌のみならず其  
 の實行を以て己が功名を立てんが爲めに、人の父、人の良人



を取り去り、一家の稼ぎ人を奪ひ去りて、以て屠戮の事に従はしむ、露國の形勢益す非なるに従つて、新聞記者の虚言は益す其の放漫の度を加ふ、彼等は何人も彼等の虚言を曝露せざるを知るが故に、醜辱なる敗北を勝利と詐り、以て其購讀者の増加によりて密かに其懷中を肥やすなり、戦争に要する財貨及び労働の益す多額なるに従つて、有司及び投機師の之れに依つて私利を營むもの亦益す多し、彼等は人皆な同様なる私利を營まざるは無きを以て、何人も彼等を罪する者なきを知り、公々然之を爲して憚らざるなり、非道、亂暴、懶惰を教ゆる兵學校に在りて多年殺人の術を習練せる

軍人は(あゝ、不憫なる者よ)密かに其給料の増加を樂むのみならず、更に上官の戦死の爲めに、己が立身の門戸の開くるを喜ぶ、基督教の牧師等は最大罪惡を人類に懲慝して休まず、頻りに神に向つて戦争を幫助せんことを祈願して以て其神聖を冒瀆し、甚しきは即ち夫の殺人の現場に臨んで手に十字架を捧げ、自ら陣頭に立つて人類の罪惡を獎勵鼓舞したる一牧師をすら、毫も非難することなくして反つて之を是認し稱讚す、日本に於て行はるゝ所も亦た之れに同じ、日本人に至りては其勝利に眩迷せる結果、更に一層大なる狂熱を以て其殺人事業に従事するを見る、日本皇帝も亦た



其軍隊を點閱し賞賜し、幾多の將校は恰かも其殺人の術に長ずるを以て高尚なる教育を受けたるが如くに思惟しつゝ、熾んに己が武勇を誇稱するなり、不幸なる日本の勞働者が、有益なる職業と其家庭より引き裂かれて呻吟すること、も露國と同じく、新聞記者が虚言を弄して収益を喜ぶことも亦露國と異ならず、而して又殺人が德行として尊重せらるゝ處には如何なる惡徳も繁茂せざるの理由なきが故に、恐らくば日本に於ても各種の長官と投機師とは競ふて私利を營みつゝ、あらん然り而して日本の兵學家が歐洲人に比して毫も遜色なきが如く、日本の神學者及び宗教家の宗

教的欺罔及び褻瀆の術も、亦た決して歐洲人の背後に落ちず、即ち彼等は啻に佛陀が禁じたる殺生を許すのみならず、寧ろ是を是認して憚らざる迄に佛教の大教理を曲解し紛更す、夫の八百以上の寺院を統轄する佛學者の大家釋宗演は説て謂らく、佛陀は固より殺人を禁じ玉ひしと雖も、而かも彼は尙ほ一切衆生が無邊の慈悲を以て融合調和し了るに至るまでは、自らも決して平和を樂しむと無けんといへり、然らば則ち相扞拮矛盾せる所のものを全然調和せしむるに至る手段として、戦争殺人も亦た必要なるものと謂はざる可らずと、



◎〔附記〕此論文中に曰く

『萬法世界は悉く我が所有なり、一切衆生は悉く我が赤子なり、……世界の森羅萬象は我自身の反照に外ならず、其の來るや一源よりし、其生ずるや一體を分つ、故に余は世上一切の萬物が各々其所を得て、存在の最小分子も亦た完全なる調和に歸着するに至るまでは決して自ら安住すると能はざるなり、是れ即ち佛陀の取りたる態度なり、而して吾人彼れの謙遜なる弟子たる者は亦同じく此心を以て彼れの跡を追はざる可らず、』

果して然らば吾人は何故に戦争をなす乎、曰く他なし、是れ吾人が當然あり得べき状態に於て此世界を發見せざるが故のみ、現世は未だ無數の愚昧なる生物を有し、無數の誤謬なる思想を有し、無數の昏迷せる心情を有す、是れ皆な無明の妄相に歸因する者なり、是が故に佛教徒は決して此等の無明の産物を排除するを怠る能はず、而も此戦争は如何に慘憺たるものあるも辭すべきにあらず、吾人は何等の容赦をも爲す可らず、即ち人生災厄の根底を破壊するに何等の慈悲も存するなし、此目的を成就せんが爲めに、吾人は斷じて自己の生命を犠牲



に供するを恐れざるべし、『云々

斯くて論者は論歩を進めて、犠牲と慈悲とに關する曖昧なる議論、輪廻の説、其他の混雜なる教理を並べ、以て喋々佛陀の所謂「殺す勿れ」てふ單純明瞭なる誠律の眞意を晦まさんと努めり、彼れ又曰く

『悪者を打たんとする兩手、之を狙はんとする兩眼、是れ決して一箇人間の所有にあらず、無常迅速の存在界以上なる高き實在界の大道によりて利用せらるゝ器具たるに過ぎざるなり』と、

千九百四年五月『オーブン・コート』誌上、釋宗演氏

### 『佛教徒の戦争觀』

以上の言たる、其狀恰かも夫の人間靈性の統一、人類の同胞觀、仁愛、同情、及び人生の神聖等に關する基督教及び佛教の教訓なるものが、全然初めより存在せずと言はんに似たり、天下豈に此理あらんや、然るに悲むべし、日本人も將た露國人も既に眞理の光明に浴しながら、恰かも野獸の如く否な寧ろ野獸よりも一層瘴惡に、相互に出來得る限り多數の生命を滅ばさんとして驅馳咆哮す、かくて不幸なる數千の人民は何故に斯かる慘害が彼等の身上に臨みつゝあるかを、眩暈せる頭腦の中に自問自答しつゝ、而かも自ら之を解す



るの途なく、空しく日本及び露國の野戰病院に於て、或は堪へ難き苦痛に呻なげき、或は懊惱苦悶の中に死亡しつゝあり、而かも同時に他の數千人は或は既に地中に或は今や地上に腐敗しつゝ、横はり、又は水腫れに腐爛して海上に浮びつゝあるなり、而して此等死者の妻たり父たり母たり兒たる數千數萬の人々は、何等の必要もなくして亡ぼされたる彼等の稼いぎ人を慟哭して措かざるなり、而かも猶ほ之を以て足れりとせず、新陣代謝、新しき犠牲は漸次に準備せらるゝなり、今や露國の殺人機關(海陸軍省)の主要なる事務は、一日三千人の豫定を以て一分間も間斷なく、滅亡に宣告されし、是

等大砲の餌食を戰場に送り出すに在り、日本人の忙殺せらるゝ所も亦之れに同じ、蝗は間斷なく河流の中に押し落されつゝあり、是れ後列の者をして其死體の上を通過して川を渡らしめんとてなり、

嗚呼何れの時か此事止む可き、而して欺かれたる人民が遂に己れに返りて、何れの時にか能く左の言を發するを得べき『往けよ、汝無情なる露國皇帝、〇〇皇帝、大臣、牧師、監督、僧侶、將軍、記者、投機師、其他何人にもあれ、汝等自ら往ひて彼の砲煙彈雨の下に立てよ、我等は最早や行くを欲せず、又決して行かざるべし』と、



『願くは我等の平和を攪ると勿れ、我等を許して耕耘し播種し建築し、而して汝——懶惰者たる汝を養ふとを得せしめよ』とは、是れ豈現今いはゆる『豫備兵』なる一家の稼ぎ人を引き裂かれて、數萬の老親妻子の號泣し呻吟するの聲が、露國の全土に響き亘るの時に於て、當さに發せらるべき最も自然の要求にわらずや、此等豫備兵の多數は大低讀書力を有し、極東に關する多少の智識を有し、此戦争が聊かたりとも露國の爲めに必要なる或物を得んが爲めに開かれたるに非ずして、唯だかの腐敗せる投機師等が鐵道を布設して利益を攫取せんと企てたる、謂はゆる租借地てふ異境の地に

於ける或種の出來事に關して起りしを知る、彼等は又た一たび戰場に出づる時は恰かも屠所の羊の如く、露國の未だ有せざる最新式の殺人機を有する日本人により、て無殘に屠られたるべきを知る、實に露國政府は日本人の有する所と同様なる武器を準備するの考を起す餘裕もなくして、陸續其人民を死地に送りつゝあるなり、斯く何事をも熟知せる彼等豫備兵は、如何ぞ能く左の言を發せざるを得んや、曰く『行け汝等、此戦争を起したる人々、此戦争を必要なりとする人々、及び此戦争を義戰と認むる人々、汝等宜しく自ら行いて日本の砲彈及び地雷火に立ち向ふべし、我等は毫も此



戦争を要せざるのみならず、又此戦争が如何にして又た何人の爲めに必要なるべきかを解せざるか故に、我等は決して出征せざるべし』と、

然れども否、彼等は此言を爲さざる也、彼等は出征す、而して又將來出征を續けんと欲す、彼等にして若し單に肉體を亡ぼすものゝみを恐れて、靈肉兩つながら兼ね亡ぼすものを恐れざる間は、彼等は到底出征せざらんと欲するも得ざるべし。

彼等は自ら論じて曰く『吾等は果して殺さるべき乎、何處に於て負傷すべきか、又何處に逐ひやらるべき乎を知らず、只

だ行けば或は助かるともあらん、而かも今や露國中に於て盛んに歓迎されつゝある水兵の如く、日本の彈丸が他人にのみ當りて自分に當らざりしが爲めに、名譽と賞典とを擔ふて凱旋し得るともあらん、之に反して若しも行くことを拒むとせんか、忽にして投獄、饑餓、毆打は並び至り、終には彼のヤクーツク地方に追放せられ、或は多分直ちに死刑に處せらるべし、是れ豈に吾等の堪へ得べき所ならんや』と、斯くて彼等は心中絶望を抱きつゝ、善良なる正しき生活を後にして、其妻子と訣別し、而して悄然と、して出で行くなり、昨日余は一豫備兵に遭へり、其母と其妻とは彼れに同伴し、



三人共に小車に乗れり、彼れは一杯を過ぎたるらしく、妻の顔は泣き腫れたりき、彼れは余の方を向き我が名を呼んで曰く、

『いざ去らば、リオフ、ニコラエギツチよ、余は今極東に出立せんとす』

『然るか、汝も亦た戦はんとする乎』

『さなり、何人か戦はざるを得ず！』

『何人も戦ふの要なし！』

彼は一瞬間反省し、而して曰く、『去れど如何せん、人將た何處に逃んや』

余は彼れが余の言を理解したるを見たり、彼は今悪事の爲めに送られつゝあるを悟りたるなり、

『去れど何處に逃んや』の一言、嗚呼是れ彼等の心的状態の直寫なり、然るに官邊もしくは新聞社會等に於ては、此心状を翻譯して『宗教の爲め、皇帝の爲め、祖國の爲め』と謂ふ也、飢餓に迫れる家族を遺棄して、苦痛と死とに赴く者が、其感ずる所を在りの儘に語るの語は即ち此の『去れど何處に逃れんや』の一言にあらずや、然るに彼の華麗なる宮殿に安居する輩は言を爲して曰く、露國人民は皆な其敬愛せる君主の爲に、及び其の國威國光の爲に、喜んで一死を捧ぐるなりと、』



昨日予は相識の一農夫より引續きて二通の書状を受け取りたり、

其一通は左の如し

『親愛なるリオフ、ニコラエフツチよ、扱予は今日兵役に就くべく召集の通知に接したり、即ち明日は大本營に出頭せざる可らず、吁已んぬるかな、是れよりは只だ極東に行きて日本人の彈丸に中らんのみ、予自身及び予の家内の悲みに就きては予は貴下に語らざるべし、予の位地の悲惨と戦争の凡ての悲惨とは、貴下の夙に熟知する所にして、又常に痛嘆する所なり、吁予は

貴下を訪問して我心事を語らんと欲するや切なり、予は貴下に宛て、予が心中の苦悶を記したる長文の手紙を書きたり、去れど召集を受けたる時、予は之を清書するの暇を有せざりき、嗚呼四人の子供を抱へたる予の妻は今や何事を爲すべきか、最早や老人なる貴下は勿論予の家族の爲めに何事をも盡し得ざるべし、去れど貴下の友人に告げて暇ある折に予の孤獨なる家族を見舞はんことを勧め給へ、若し又予の妻が其寂寥の苦痛と子供の重荷とに堪へずして、心を決して貴下を訪ふことあらば、願くば幸に彼女を引見して少しく彼女を慰め給へ、是れ予の切



望に堪へざる所なり、彼女は未だ親しく貴下を知らざれども深く貴下の言葉を信ぜり、而して之れ最も肝要の點なり、

予は召集を拒むこと能はざりき、去れど予は豫じめ告げん、日本人の一家族だも決して予の爲めに孤獨となること無かるべし、我が神よ、如何に怖るべき事共なるぞ、共に接みにし人々を棄て、全身を込めたる事業を擲つ、嗚呼是れ何たる苦痛悲慘の事なるぞや、』

第二の書面は左の如し、

『最も親切なるレオフ、ニコラエギツチよ、

入營して僅かに一日を過ごしたるのみなるに、予は既に無限の長きを感じる迄に、落膽苦悶の中に陥れり、朝の八時より夜の九時まで、家畜の一群の如く兵營の庭に群集して、彼方此方に引き廻され、滑稽なる診断は三回まで繰返され、而して自ら病氣なりと申立てたる人々が、合格の印しを付せらるゝ迄には、僅かに十分間の注意をも受くる能はざりき、是等二千人の合格者たる我々が、指揮官の面前より驅られて兵營中に入るの時、路傍には殆んど十町ばかりの間、親戚、老母、及び小兒を抱ける妻女が堵を成して立てり、嗚呼若し貴下にして、如何に彼等が其父、良



人子息に取付き相抱きて號泣悲鳴するかの状を見しならば、其感果して如何ぞや、予は貴下の知らるゝ如く、概して靜肅の動作を守り、又た我が感情を制抑するを得るものなるが、此時には遂に堪へ切れずして亦涕泣せり、新聞記者の用語を以て此状を記せば、愛國の志氣は無限に發揚せられたりと云ふならん。

今や全世界の三分の一を掩へる無限の悲痛を量るべき標準は果して何物ぞや、而して我等は今や大砲の食物たり、遠からずして吾等は復讐と暴戾との神の前に人身御供として捧げらるゝなるべし。

余は今や心氣悶々として寸時の平和を保つと能はず、嗚呼、余をして唯一の主なる神に仕ふるを得ざらしむる余の二心は、如何に自ら嫌惡すべき者なるぞや、

此人や、彼の肉體のみを破滅する所の者の決して恐るべきにわらずして、恐るべきは實に肉體と靈魂とを兩つながら破滅するに在ることを、未だ十分に確信し居らざるが故に、斷然自ら出征を拒絶すること能はざりしと雖も、而かも彼は其家族と訣別し去るに臨んで、日本人の一家族だも彼れの手<sup>て</sup>に依つて孤獨となること無かるべきを約したりき、彼は實に神の大法、一切宗教の法則、即ち己の欲する所之を人



に施せてふ法則を信せる者なり、斯の如く多少此大法則の  
 價値を認め且つ之を自覺するの人は、獨り基督教徒中の  
 み之を見るにあらずして、彼の佛教、回々教、儒教及び波羅門  
 教の世界に於ても、啻に數千と云はず實に數百萬を以て數  
 ぶるを得べし、

世には眞個の英雄あり、是れ彼の他人を殺すのみにして自  
 身は幸に殺されざりしと云ふを以て、世人の爲めに崇拜祭  
 祀せらるゝ底の英雄にあらずして、彼の絶對的に殺人者の  
 列に伍するを肯んぜず、耶蘇の法則に違背せんよりは寧ろ  
 道の爲めに殉するを甘んじて、或は牢獄に入り或はヤク

ツクの邊陲に流竄され居るの英雄なり、世には又予に書を  
 寄せし人の如く、身は已むを得ず從軍すと雖も、決して自ら  
 殺人を爲さずと誓ふの人もあり、然り而して大多數の人民  
 も亦、其初めや自己の所爲に就て深く思考する所なく、又思  
 考するを欲せざりしも、今や漸やく其心底に於て、彼等をし  
 て其勞働を離れ其家族に別れしめ、其靈性と信仰の命する  
 所に反して無要の殺人を爲さしめんとする當局有司の命  
 令に服従するを以て、明白なる要事なりと感ずるに至れり、  
 而かも彼等が從軍出征を肯ずるは、唯だ所謂「何處に逃れん  
 方もなき」までに四面抑塞四圍暗澹の中に彷徨すればなる



のみ、

之と同時に郷里に残れる人民に至りては雷に之を感じるのみならず、又之を悉知し且つ之を公言す、昨日予は途上に於てツラ市より歸り來る農夫等に會せり、其一人は手に一葉の印刷物を持ち、讀みながら小車の傍らを歩めり、予は問へり、『そは何ぞや、電報なるか』

『是は昨日の電報なり、されど本日のも茲に在り』

彼は衣囊より他の一葉を取出せり、我等は共に立ち止まり、余は之を讀めり、

時に彼は曰へり『貴下は昨日停車場にて起れる事を見られ

しならん、そは實に慘酷なりき、妻や小兒や、其數千人に超ゆべし、皆な泣けり、彼等は列車を圍めり、左れど近寄るを許されざりき、見物せる他人も亦泣けり、ツラ市より來れる一婦人は率倒して遂に死せり、後には五人の小供あり、彼等は諸所の養育院に送られ居りしに、其父は同じく出征せしめられき……かの滿洲にもあれ、或は何洲にもあれ、我等は何の要する所ぞ、土地は是れにて充分ならずや、何を苦んで此の無數の人民と財産とを破滅せんとはするぞ』

然り、人類と戦争との關係は今や全く昔日と異なり、近くは千八百七十七年頃に比してすら全く趣きを異にせり、實に



今日の戦争は未曾有の出来事にあらずや、

諸新聞紙は報じて曰く、露國皇帝が其殺人の爲めに派遣すべき人民を魔睡するの目的を以て、國內を巡幸するに當り、各地人民は非常なる熱心をもて之を歓迎し、以て偉大なる愛國心の發揮を示せりと、然るに事實は全く之れに反せり、某地に於ては三人の豫備兵縊れて死し、某處に於て更らに二人を加へたり、而して或地方に於ては、其良人を取り去られたる一婦人が、其小兒を徵兵係の室に伴ひ行き、其處に之を捨て置きて行衛知れずなれるあり、又或婦人は軍隊指揮官の庭内に入りて縊死せりと傳ふ、全國民は不満と幽憤と

絶望とを以て充されざるはなし、彼の『信仰の爲め、君王の爲め、祖國の爲め』てふ語句や、國歌や、萬歳や、最早や、人民に對して以前の如き効力を有せず、今や實に別種の戦争——即ち人民が其賦課せらるゝ事業の虚偽と罪惡とを自覺するより生ずる心中の苦悶苦闘は、漸次に彼等の間に延蔓しつつある也、

然り、我等の時代に於ける大争闘は、今の日露間の其れにもあらず、黄白兩人種間に激發せんとする其れにもあらず、地雷、爆彈、銃丸に依りて行はるゝ其れにもあらず、實に精神的争闘也、而して此争闘や、將さに大に發揚せんとする或進歩



せる人類の自覺と、一般人民を圍繞し壓迫せる暗黒及び重荷との間に、間斷なく行はれつゝある所の最も激烈なる戰爭たるなり、

耶蘇は其の生時に於て自ら仰望する所を示して曰く

『我は火を地に投入れんが爲めに來れり、我れ何をか望む、既に此火の燃たらんこと也』〔路加傳第十二章第四十九節〕

嗚呼耶蘇が渴望せし所は今や着々成就せられつゝあり、即ち火は熾んに燃へつゝある也、然らば則ち我等をして此火を防遏せしむると勿れ、否な寧ろ之をして焰炎天に伸するに至らしめよ、

一千九百四年五月十三日

若し茲に本篇の主意を強むべき一切の材料を添加せんとせば、予は殆んど本篇を終ふるの時なかるべし、昨日日本甲鐵艦沈没の報知は來れり、而して露國の謂はゆる上流社會、交際社會、富裕にして教育ある社會に於ては、其良心の苛責を微塵だも感ずるとなくして、一千人の生命の勦滅せられたるを歡喜し祝賀しつゝあり、然るに今日予は社會の最下層に立てる一水夫より左の如き手紙を受取りたり、

『尊敬するレオフ、ニコラエフツチよ、予は低頭して、愛心を



捧げて、予の意を貴下に致す、尊敬するリオフ、ニコラエ井  
ツチよ

予は貴下の著書を読みたり、そは予に取りて實に善き讀  
物なりき、予は貴下の愛讀者なり、扱リオフ、ニコラエ井ツ  
チよ、我等は今戦争の状態に在り、我等の指揮官が我等に  
殺人を迫るは神の意に叶ふや否や、願はくば予に教示せ  
よ、眞理は今果して地上に存在するや否や、願はくば予に教  
示せよ、リオフ、ニコラエ井ツチよ、必ず之を予に告げよ、當  
地に在りても教會に於ては祈禱文も讀まれ居れり、牧師  
は基督愛護軍の事を説き居れり、神は戦争を愛すとは眞

なりや否や、至囑すリオフ、ニコラエ井ツチよ、眞理が地上  
に存せりや否やを見るべきの書籍を予に示せ、請ふ斯く  
の如きの書を予に送れ、如何に高價なりとも予は之を拂  
ふべし、願はくばリオフ、ニコラエ井ツチ、予の求めを忘るゝ  
勿れ、若し書籍なくば手紙を予に送れ、予は深く貴下の手  
紙を得るを喜ぶ、予は渴したるが如く貴下の手紙を待つ  
べし、さらばよ、善き健康と善き成功との貴下の上に在ら  
んとを予は切に神に祈る』

次に住處姓名あり、曰く旅順港、而して艦名、職名等をも附記  
せり、



予は此の親愛すべき眞摯なる眞個達識の人に對し、直接に言語を以て答ふること能はざるを悲しむ、彼は今既に文書或は電報の通せざる旅順港に在り、然れども我々は猶ほ互に交通すべき方法を有せり、其方法は即ち我々の共に信ずる神にして、戦争が決して神の意に適はざることとは我々の共に神に關して知り得たる所なり、彼れの心に起りたる其疑ひは、同時にものづから其の解釋を含めり、而して此疑ひは今や數千數萬の人心に生起し來れり、露國人に限らず、日本人に限らず、凡てかの暴力を以て最も人生の自然に反する行爲を強ひらるゝ、不幸なる一般人民の心中に於ても亦

た然り、

人民は既に一種の催眠術に依つて盡惑せられ、政府は猶ほ之を以て人民を昏睡せんと勉め居れど、催眠の期間は早く將さに盡きんとし、其効果は既に漸やく微弱となれり、而して一方には、我等の指揮官が殺人を我等に強ゆるは果して神意に合するや否やとの疑問は層一層に強きを加へ、一たび起りたる此疑は如何にしても到底消ゆべくもあらず、時々刻々益ます廣く傳播し居れり、

嗚呼然り『我等の指揮官が殺人を我等に強ゆるは果して神意に合するや否や』この此疑問は、即ち彼の耶蘇が地上に燃



したる火の火花にして、今や正さに非常の勢を以て傳播を  
始めつゝあるなり、之を計り之を感ずるは一大快事に、あら  
ずして何ぞや、

レオ、トルストイ

千九百四年五月廿一日 ヤスヤナ、ポリアナに於て

## トルストイ伯時局談

人種よりも人類——歐洲文明の罵倒——伯の  
日本人觀——支那人及び印度人の賞讚——伯  
の愛國心——人類の將來——日露戰爭に對す  
る伯の熱中。

佛國巴里のフヰガロ新聞は、其特派通信員がトルストイ  
伯を訪ふて伯の日露戰爭觀を問ひ質したる長篇の記事を、  
過ぐる三月十八日より三十一日に亘る紙上に連載したり。  
左は米國紐育の週報に轉載せられたる所に據りて、其記事



の大要を重譯せるものなり。

予は一日と一夜との間、トルストイ伯の家に客となつた。予が家僕に案内せられて、下の小さい書籍室に這入る間もなく、翁は左の手の拇指を脇なる革帯に挿し込み、右の手を長く伸ばし、髯のあいだには心寛かなる微笑を湛へつゝ、三步ばかり大きく蹈んで、悠然と現はれ來つた。げに是れ、伊太利の名手が描きなしたる大慈大悲の神が、俄かに天降りましたかと思ふやうである。そして恰かも人類の父イエスキリストが淡彩もて畫き出されたやうに、周圍の一切のものにチャンと締りを與へた。そ

の額は隆く且つ潤く、あたかも城壁の時つたやうだ。鼻は大きく、口は堅く結び、眉と上鬚とはムシヤクシヤと生えて灰色である。下髯は長く且つ波うつて居り、耳はドンナ微かな音にでも感ずるといふ風に前向きに立つて居る。が、其相貌のうちで最も人並ならぬものは眼だ、噴火口中の石炭かなんかのやうに輝いて居る其の深い眼の睥睨である。其眼で以てデット人を視凝めるときには、腸の底までさし徹すかとはかりに思はれる。そこで直ちに予が念頭に起り來つた感じはこれである、自分は今ま如何なる仕事でも必ず成し遂げられないことはないと云



ふ人の前に立つて居る。

トルストイ伯は先づ戦争について語を開いた、『何か新らしいことがありますか』と尋ねて、さて頭を掉りながら続けて言つた、『今度のやうな戦争に誰れがどうして無頓着に居られましたやう、人間と人間との間だにこゝろいふ戦争をすると云ふのは、何とマゝ惨ましい事柄でしやう子』

予は眼を擧げて、佛蘭西出来の滿韓地圖の壁にかゝつて居るのを見た。予は答へて云ふに『此戦争は單に二國民間の戦争ではありません、二人種間の争ひで御座いま

す。貴翁の御考へでは、此戦によつて双方の人種がドウいふ風に成るだらうと思召で御座いますか』

### 人は其本務に冷淡にして居る

『それはドウでもいゝではありませんか、私は人種の違いに差別を立てることはしません。私は何よりも第一に、人類の爲めに存在して居るものです、何事にあれ此戦争に由つて起つて来る事件は、それが人類に何を與ふるかといふことを考ふるばかりです。私が此戦争を悲しむといふのは、これに由つて、人間が何處まで其本務を忘れ、



もしくは之を無視して居るかといふことが分るからであります。家族もしくは國家に對する務めよりもモット大切なのは、神に對する務です、もし神といふのが貴下の氣に入らなければ、『宇宙』其物に對する務です。私が神と呼ぶところの此の『宇宙』なるものは、凡ての分争を超越したものであります。私は宇宙に屬する一物である、全宇宙の調和を形ち造つて居る一分子であるといふことはどうしても疑はれません。自分と此大調和との關係を念ふのが、世の中で宗教と言つて居るものであります。しかるに人は此根本の考を忘れてしまい、かの尊重すべ

き聖書を讀むことをも廢めてしまつた。彼等は頑迷にも野蠻の狀態に止らんと一生懸命に勉めて居るのであります。彼等はいろくと思慮工夫をこらして恐るべき戦争に従事し、其第一の本務、即ち正しき心を持ち、鬭争をやめるといふ肝心の務については、何の思ふところない有様ではありませんか』

老偉人は、徐かなるしかも莊重なる音聲と、悠々迫らず、落ちついたる確信の態度とを以て説きはじめた。予は往昔コリント人の前に道を説いた聖パウロの風牟を想ひ起した、其時の彼れの言葉は、恐らく予が耳底に響



きつゝあるものと同じやうであつたらう。

『それは其れに違ひ御座いません、しかし此戦争は已に一箇の事實であります。今は姑らく其原因を探ねたり其責任の歸するところを問ふたりすることを措いて、すでに起り來つたる事實として之れに面する外、仕方は御座りますまい。ところで、此戦争の終局といふものは必ず來る、さて此終局が文明の點に於いて如何なるものを齎らし來るか云ふことは、人類進歩の上から見て、決して閑却すべからざる事ではありませんか。又た、今日人類のうちで最も進んで居る分子が、此戦争の力によつて、

遅れて居る分子に手を伸し得るやうになるのは、甚だ望ましいことでは御座いますまいか。』

翁は答へた、『ソウ、それは多くの人が口にする議論です、さうして此議論は凡ての行爲を辯護するに大さう便利な論法です。私は敢て此論法に反対はせぬ、文明が其到るところに活動的な教化的な勢力を伴つて行くといふことは、私も認めるところですが、しかし、そんなら何處に其文明があるのですか。無論歐羅巴にと貴下は云れるでしやうが、それは歐洲人が勝手に不自然な慾望を拵らへおいて、さうしてまたそれを満足させる爲めに其の



才能を揮つて居る有様を云ふのですか。又た彼等が鐵道、電信、電話、其他多くの便利なものを發明したからさう仰しやるのですか。これ等いはゆる文明の利益といふものは、私の眼から見れば、凡て人の野蠻性が工夫し出したものであります。此等は皆な人間の最も卑しい性質に對して役に立ち、また之を喜ばせるものなので、これに由つて人間の道義が少しでも加つたといふことを私は知らぬ。反つて私は、人が其智力を用ふるに多くは邪道にあちいり、その善く用ひられる場合は至つて少ないと云ふことを認めざるを得ません』

予は言を挿んだ、『しかし、人はたゞ武器とか物質的快樂の具とかいふものばかりを造りは致しません。其疲勞を輕うし、其勤勞の時間を短うする器械をも工夫して居ります。』

『さう、勞働を少ふする方法ですか。しかし勞働は善いことで、さうして人の心身を健全ならしめるものであります。非常に美はしい、心地よい、興味のある事柄であります。』

### 過劇な勞働と慾望との關係



『過劇な労働は強い慾望から起るのです。もし人々が自分の慾望を制限して御覽なさい。これによつて同類多数の疲労を輕うし得ること決して少くはないのです。であるから、労働を止めることは少しも要らぬ。慾望を制しさへすればよろしいのである。しかるに近世の發明なるものは、人間の慾望をますます增長せしめて、かの礦夫の如き下賤さわるる労働を何時までも繼續せしむるばかりであります。』

トルストはドシリクと此論法の本鎗で押し込めて往つた。そうして夜に入つて議論は復た一層の花を咲か

して此事に立戻つた。

彼れ曰く『否なく、私が人間の精神が果してどれほど進んだかといふことを見ねばならぬといふのは、かの發明や何かを標準にしていふのではありません。世間で人が其進歩をあらはすものゝやうに考へてゐる鐵道や電信や、そんなものなどには、私はどうしても感心するところが出來ない。吾々はピラミッドを見て驚く、しかしながら同時に自ら問ふ、此んなものは一體何の役に立つたのかと。吾々が今日文明の産物と稱するものは、丁度このピラミッド同様です。思ふに幾千年の後ち、吾々の遺



物を發見して、斯ふ言つて驚く人民があるでしやう、出來る丈けの速力でもつて地球の一ト所から他の一ト所へ旅行して廻ることを人生の一大事のやうに心得て居つた人民は、ドンナ奇妙な物どもであつたろうと。彼等の言ふことは恐らく正當でしやう。私にはまだ旅行の必要が分らぬ。旅行とは只だ時間を浪費せしむる丈けの仕事のやうに思はれる。それは慥かに勤勞の邪魔物であります。』

予は日本人が無情で殘忍な人民で、外國人に對しては敵意を有し、喧嘩腰の争い好きな人民であること、彼等が今尙は體罰を行ふこと、彼等はたゞ軍艦とか鐵砲とか

其他軍事上及び政治上の設備に必要な道具——それを以て歐洲人に打撃を與ふるに都合のよい武器——のみを歐洲から借り來つたものであること、さうして、此の有爲なる蠻人は、今や無頓着な溫和しいスラブ人と、對抗するやうに立ち至つたと云ふことなどを縷々物語つたのち、最後にかのジュール、ユールの力ある句を引いて予の言を結んだ。『假りに成功覺束なき勝利が日本人によつて獲られたりとせよ、そが與ふる利益は只だ極東の勃興てふこと也、而して此勃興は世界の平和及び文明的進歩てふ思想に、恐るべき危害を及ぼさずしては已まじ。』



之れを聞いたトルストイは『日本人は本當に貴下の言はれる通りでありますか。私は本當に能くそれを知りたいと思つて居ります。私が再三再四繰り返して其書を読み、讀して居る一人の著者がある、それはかのパスカルであります。そのパスカルの申して居る言葉に『アレキサンダー大帝の節慾には誰れも競争しやうとするものがない、人はたゞ其征服の跡に倣ひたがるばかりである』と云ふのがある。丁度そんなもので、日本人が歐羅巴の欠點のみを真似て居るといふのは、餘程事實に近いやうです。併しそれは別段大した事柄ではない、多分日本人には良

い性質も悪い性質もあるであらう、しかし凡ての國民が遭遇するやうに、日本人も亦た進化の最中に居るのであつて、やがて野蠻の境涯を去つて、あらゆる束縛から脱却し去る時があるであらう。今の日本は丁度カサリン第二世治下の露國に似て居る。吾々が進化の途を踏んで行くやうに、日本もまた同じ進化の道程を辿つて居るのである。さうして日本の一轉化を來たす時代が必ずくるに相違ない。彼れも亦た世界一般の理法に従つて、自分を發達せしめ完成せしめる外はないのであるから』と極めて日本の將來に望みを屬して居る。



ソコで予は更らに論歩を進めた、『日本人は黄色人種であります、何處に黄色人種の文明に進んだ例がありますか。支那を御覽なさい、數千年の間、更らに進化の跡の見るべきものはないではありませんか』。

『吾々歐洲人は、黄色人のことについて殆んど知らぬといつてよろしい。よく之を學び、之を究め、其本心の眞底まで探つたものは、誰れもないではありませんか。私が見るところでは、支那人や印度人は戦争好きの人民ではない、むしろ干戈を輕んじ、之を動かすものを賤しめて居る。これ丈けでも慥かにエライ、吾々よりも優つて

居るといはなければなりません。彼等がこんな人殺しをしないといふのは、自然と譯があります、私は漫遊者の書いたものに由つて、彼等は専心に商賣を營むものであると云ふことを學んだ。彼等は互に言ふところを重んじ、虚言などを吐かず、尙ほまた歐羅巴で中々見ることの出來ない種々の長所があるそうです』

『マー、しかし其の外交を御覽なさい、狡猾と譎詐、さうして反覆常ないといふのが、その持ち前へではありませんか』

『成程貴下の言はれる通りです、さうして其上迫害をも



する。これは奇體です、一體どうした譯でしやう。併し、彼等の哲學はなかく賞嘆すべき道理に基いて居るやうです。孔子、佛陀、皆左様でしやう。で、もし彼等が殘忍であるといふならば、吾々歐羅巴人もまたさうではありませんか。誰れがいわゆる世界文明といふもの、門戸に横はつて居る殘虐を勘定して見たものがありましたやうか。歐洲における文明の行動、文明の結果といふものは、何處に見ることが出来ますか。世界は全體進んで居るのだろうか退いて居るのだろうか。人が斯いふ問を發すやうな時が到來して居る。英吉利がトランスバールに遠

征したのは、實際英國それ自身の體面と品位とを隕したものと云ふことは出来ないでしやうか。一體殖民事業のうち、何處に眞正の文明と云ふ考が見えますか。こゝにいふ風に考へて來ますと、この人種が勝てば人類の幸福を來すに便である、かの人種が勝てば不便であるといふやうなことを、チャンと頭から極めて言ふことが出来まじやうか、如何でしやう。』

『一寸伺はして下さい。今此場合で、露西亞の運命が繫がつてある此場合で、貴翁が一箇の露西亞人として、たとへ貴翁が平素戦争なるものについて、また特に此戦



争についてどういふ意見を持つて御出でなさるうごも、  
 茲は特別な除外例といふやうな議論は持つて御出でなさ  
 らないでしやうか。私のかく御尋ね申すのは、貴翁が従  
 來一生を通じて御説きになりました思想では御座いませ  
 んで、其應用または敷衍とでも申すやうなものです。』

人殺しはドンナ皮を被つても

嫌ふべきもの。

『イヤそんなものは有りません。しかし私は眞實な所を  
 申さなければなりません』と笑ひながら答へて『私の心

の奥底を探つて見ると、まだどうも全く愛國心から脱却  
 したと思へないので。祖先の遺傳や、多年の教育など  
 の爲め、それが私の内心にくつついて居て、どうしても  
 離れないのです。そこで私は私の理性を喚び起して之れ  
 に訴へ、之に由つて私の第一の本務といふことに心を向  
 けねばならぬ。さうすれば、私の良心は、些しの躊躇も  
 なく、世界の判断も輿論も、人間本心の判断には及ばな  
 いと云ふことを答へるのです。左様、私の良心は、人殺  
 しはよしドンナ形で來ても嫌ふべきものだ、戦争は恐る  
 べき大疫病であつて、之れに關係したものは何でも悪い



にきまつて居ると、私に告げるのです。』

茲に初めて、予はトルストイが熱心を以て燃えて來たのを見た。其言葉は唇の間から迸しり出で、其聲は震ひ、其眉間には皺が寄る。其眼は恐ろしく光かる、其大きな胸は内なる勢力の爲めに太く波うつのが見える。彼れは今燃え上がつて來たのだ。

『イヤ、どうして、これよりも恐ろしいことはない。成吉斯汗の時には、自分で人殺しを望んだ者ばかりが人を殺したのだ。人々は己が好むところに従つて、或は自分の家にとまり、或は其田地を耕やしつゝ、平安に善

事をなしながら暮してよかつたのです。しかるに文明世界の今日は、成吉斯汗の時よりも一層猛惡になつたのです。人民は、好むと好まざるに論なく、人を殺せと命令せらる、さうして若しいやだと言へば、直ちに罪人として罰をうけるといふ次第なのです。どうしてこんな世の中の有様を是認して居られましやう。吾々の良心は、ドウして之れに對して反抗せずに居られましやう。ドウしたことでもしやう、世の中の人々が此の慘怛たる暴虐に目を閉ぢて居るといふのは。こんな事柄が繼いで居るあいだは、何が出来るものです。何をしやうと思ふことさへ出来な



いではありませんか。世人がこういう下劣きわまることに屈從して居るあいだは、人の精神を高尙にするなんぞは、ドウして望まれまじやうか。ア、實に痛歎の限りです。』

『もし貴下の手に小刀を持たして、其處に居る私の孫女を切れと命じたものがあるとしたならば、貴下は死んでも、そんなことはなさいますまい。何故といへば、それは貴下の道義心がなし得ないからであります。その如く、もしクリスチャンの本務といふものが、良心の聲に従ふことに在るならば、鐵砲を取つて之を同胞人類に向ける

といふことは、到底出来ることゝは思はれませぬ。』

偉人の聲は沈靜になつて來た、さうして今や大なる悲哀と限りなき憐憫の情とを以て語つて居る。暫時たつて、彼れは以下の如く其語を結んだ。

『人は何時でも「自由」といふ美名を口にする。けれども、彼等は事物其ものを創じめ、之を堅固にし、又之れをチャンと整へるといふことはしない。問題は只だそれ丈けです、兇暴を禁壓し全く之を止めて御覽なさい、左すれば自由はおのづから起つて來る』

『此世の兇暴を全廢するには、先づ人間其物の息の根を



断つてしまふ必要はありますまいか』と予は問ふた。

### 兇暴は人間のつきものでない。

『そんなことを言つてはいけません。兇暴は必ずしも人間の附き物ではありません、私は之を嫌つて居る人々を知つて居り、また之れが全廢せられた社會を想像することも出来る。例へば私と貴下とは、御互の間に兇暴の行爲の無益であるといふことを認めて居る。それは吾々が一層高き權力即ち道理といふものに訴へることが出来るからです。人間は始終兇暴を行はふとして居るもの、ま

た之を行はずしては居られないものといふやうなことは言へません。兇暴の跡を社會から絶たねばならぬといふ教を唱へれば唱へるほど、それ丈けそれが禁止せられて行くではありませんか。兇暴の行爲を全く否認した一の宗派は、かの「ドウコボル」派です。彼の派の爲し遂げたことは、飽まで其道理の命ずる所を貫いた結果でありました。さらば人類一般が同じく此處に達せられない譯は決してありませんまい。』

『それはどれ丈けの艱苦を経たのちのこととて、又たどれ丈け遠い行先きのこととてしやう』



『年月の長短を問ふ必要はありません。人間進化の歩みは極めて遅々たるもので、吾々の眼には殆んど分らないほどです。しかし決して止まず決して息まないものであります。吾々が其れをまどろかしく思ふて氣を揉むのは、抑も間違つたことです。一體吾々は物事を判断するのに兎角く自分の旋木に當てはめる、僅かばかり經て來た自分の年齢なんどいふ、小ッぼけな時間の尺度に當てるのである。モ少し眼を大きくして過去幾千年の歲月や、未來千萬年のことに考を及ぼして見るがよろしい。此の高處より見おろして見るならば、前に私の言つた所は、決

して不當な希望ではない。人がドウして人間の進歩といふことを否定することが出來ましやう。原始時代の殘忍猛惡の風は、已に悉く取り去られてしまつたではありませんか。異教の迫害とか、奴隸の虐待とかいふことは、はや過去の夢となつた。これ丈けでも決して小さいことではありませぬ。で、人間は日毎／＼に、少しづゝまた少しづゝ、其束縛を解きながら進んで行く。其の全く自由の身となる日の來るのは、必ず疑ひがありません。』

『併し貴翁よ、さうなるまでには幾百世紀といふ年月がかゝるでしやう、さうして居るうちに地球の運命が循つ



て来て、人類は宇宙の大進化の波の中に、消滅してしま  
うかも知りません』

『ア、それは或はさうかも知らない。しかしそんなこと  
は考へない方がよろしい。此理想は高尚純潔であるかど  
うか、それは正義と真理とに基いて居るかどうか、これ  
さへ問へば充分であります。さうしてもし之れに答へて、  
然りといふことが出来るならば、人は飽くまで之を貫か  
ねばならぬのです。』

日露戦争は常にトルストイ伯の脳裡を離れない問題で

ある。予は伯の家に居た間に、暫時伯の夫人と共に櫓を  
驅つたが、其際予は此問題に對する伯の態度について、  
尙ほ深く夫人に尋ねた。

『マア、それは廢して下さい。良人は何事を差し措いて  
も、先づ戦争に關する新しい報知をといふ風なんです。  
此の間も七里半もあるトローラまで、しかも雪中馬に乗つ  
て行つたので御座います、それが戦争の電報を受取る爲  
めといふ譯なんぢありませんか』とは夫人の口早やに  
語つた答であつた。

《をばり》



# トルストイの日露戦争論に對する倫敦『タイムズ』の批評

(國民新聞より轉載)

トルストイ伯の戦争論は、近來の大文章にして、實に、信仰の告白なり。政治的宣言なり。露國の兵士の苦悶の描寫なり。而して同時に、奇なる心理の研究なり。此の論文を讀むものは、また、トルストイ伯の如き、歐洲の思想を不完全に消化したるスラヴの思想家の、心的態度と、純粹なる歐洲諸國民の心的態度との間に、顯著なる

相異の存する事を看取せざる能はざるべし。第一流の文豪が、十三世紀の論理法と、近世の社會主義を混ぜ合せて、不調子なる議論を表白するが如きは、實に露國に於てのみ、なし得べき事なり。トルストイ伯は、其政論の根據として聖書の句を用ゐると同時に、中世の煩瑣學派の凡ての獨斷と凡ての不合理なる議論とを信仰する人也。然るに、他方に於て伯は、露國正教の教儀を、不合理なりとして排斥し、又一般歴史的基督教の信條を、獨斷なりとして否認するの矛盾を敢てす。伯の説教の中心的思想は、流血を以て大罪惡となすにあ



り。然るに伯は人民をして、治者は凡て強盜なりと信せしめ、彼等を煽動して、最も恐怖すべき流血——即ち社會戦争を起さしむべきが如き言をなすを憚らず。

吾人は、伯の熱心と、誠實を疑ふものにあらず。然れども伯が、其の描寫を強くし、其の誹謗に力を與へんが爲めに用ゐる言語文字の、度合を外れて激烈なるは、吾人また之れを認めざる能はず。識者は蓋し、伯の言を其儘に受け取る能はざるを感ずべし。

此の論文に於ける、識見の博大ならざる事、及び創見の缺乏せる事は、即ちトルストイ伯の思想の特色を示すも

のなり。吾人は之を讀んで、伯の思想の限界と、缺點とが、此の戦争の危機に於て、如何に明白に暴露せられたるかを觀察するを得たり。世界の現在の社會的及び政治的秩序を支配する主要なる事實を看取する能はざる伯の無能、現在の秩序を維持する人物及び制度に對する伯の敵意、及び其の破壊せんとする秩序に換ゆべき、新秩序を考案する能はざる伯の無識、此等の大缺點は、極東に於ける戦闘と敗北との報知の、伯の耳朶に到達するに従て、愈々著しく、愈々甚だしくなれり。伯は、人類の進化に於て、善は必ず惡に勝つべく定められたりとの確信



より來れる、靜肅なる大忍耐を、毫も有せざる人物なり。』  
 偏狹なる理想と、頑固なる論理のみを以て、人世を解釋  
 せんとする議論家は、殆ど常に、人世の實際と矛盾せる  
 結論に達す。トルストイ伯亦此種の議論家にして、凡て  
 の戦争を絶對的罪惡となせる其の獨斷を根據とし、其の  
 偏狹頑固なる論法を以て、其の信仰と思想とを説教す。  
 伯は、日露の戦争に、直接にも間接にも、關係するを拒  
 む事を以て、露國人民の道德的及び宗教的義務なりとな  
 し、それが爲に、旅順陥落するも、莫斯科占領せらるる  
 も、聖彼得堡攻取せらるるも、それは問ふべきにあらず。

戦争に關係するを拒むの義務は絶對的なりと説き。更ら  
 に曰はく、帝冠を戴ける専制者も、田野を耕せる農夫も、  
 義務の結果を考慮すべき權利を有せず。其の結果彼等自  
 身の死なるや、將た國家の滅亡なるや、固より知るべか  
 らず。其の孰なるも、それは決して問ふべきにあらず。彼  
 等は、彼等の義務を行はざるべからず。殺人を行ふを拒  
 まざるべからず。斯くせずんば、正義の王國は終に建て  
 らるゝ能はずと。トルストイ伯はまた海牙仲裁々判も、  
 歐洲協調も、プロツホの學説も、併せて之を排斥したり。  
 伯思へらく、如何なる智識の播布も、如何なる制度の設



定も、以て人類を救済する能はず。人は其生活の正しき指導者を失ひ、今の所謂指導者は、唯だ民衆を強いて、罪悪を行はしむるの勢力を有するのみと。伯は凡てのものを攻撃し、凡てのものを排拒し、何ものも、世を救ふの力を有せずとなし、世は只伯の意見に遵ひ、伯の信仰を信じてのみ救はるべしと考ふ者の如し。伯は、所謂科學なるものも、教會の迷信も、毫も世を益するものにあらずと説く。露國の幾多の神學者が、今回の戦争に對して試みつゝある、明晰なる卓見の批評を以て、トルストイ伯の、此の奇怪なる、夢幻的陳説に比せば、是れ實に

著しき反照なり。

トルストイ伯は、露帝に對して、激烈なる攻撃を試みたり。曰く、海牙平和會議の發議者は、他國の土地を強奪し、強奪したるものを防禦せんが爲に武力を増加し、以て平和を保持せんとす。何ぞ其の成す所の誤れるの甚だしきや、一億三千萬人の君主と仰がる、彼の不幸なる若年の人は、絶えず欺かれて、殺人罪を行はんが爲めに、其の軍隊に感謝しつゝありと。伯はまた、戦争に宗教的意味を與へんとしたる教會の攻撃に向て、多大の力を費したり。



トルストイ伯は、今回の戦争の原因を説明して曰く、宮廷の野心家及び功名に渴したる武將は、人民を殺して其の慾望を達せんと決心したり。之れが爲めに、不幸なる農民は、血を流さざるべからず。支那及び朝鮮に於て、行はれたる凡ての悪事の犠牲に供せられんが爲めに、欺かれたる人民は、極東の野に輸送せられて、殺戮せられざるべからず。而して戦争が長く繼續するに従て、人民の殺戮せらるゝ事愈々多きを加ふべしと。伯は斯の如く、戦争の原因を以て、野心家の行ふたる罪惡にありとせり。然るに奇なるは、伯が露國の侵畧的行動を以て、惡

事なりと識認しながら、此の惡事に對抗して立ちたる日本<sup>の</sup>行爲の攻撃に於ても亦た劇烈を極むる事是なり。斯の如きは蓋し、伯の議論の特色なり。

伯は問ふて曰く、人民が、皇帝、大臣、僧侶、新聞記者、投機者等戦争の主張者に向ひ、汝等自ら進んで、榴彈爆裂し、銃丸雨飛する戦場に出でよ。戦争は汝等の始めた所に於て、我等の關知する所にあらずと云ひ得る時は、何れの時ぞやと。伯また曰く、露國人民の多數は、戦争の甚はだ恐るべきを知る。殊に日本の武器が、露國の武器よりも、強烈なる破壊力殺戮力を有するを知る。然る



に彼等が、尙ほ戰場に向ひつゝあるは何故ぞ。是れ決して愛國心の爲めにあらず。全く強制の結果なりと。

伯は、此の言を證せんが爲めに、多くの書翰を引用せり。其の書翰は、若し實際露國兵士の一部の感想を表白するものとせば、頗る興味多きものと云はざるべからず。旅順の一兵士は、書をトルストイ伯に寄せて問ふて曰く、『我等の司令官は、我等に殺戮を行ふべきを強ゆ。是れ神意に協ふものなるや否や』。『世界に真理の存するや否やを教ゆる著書ありや』と。伯は兵士の思想皆な斯の如しとなすと同時に、露軍々人中に愛國心を有するものは一

人もある無しと論ず。此の言の大なる誇張なるや明かなり。然れども、一國民が、外國と戦争せる時に於て、國中の最大の思想家の一人が、斯の如き言をなすは、其の國民の愛國心の缺乏を表示せる、一大現象にあらずや。

《完》

## トルストイの日露戦争観終



明治三十七年八月十七日印刷  
明治三十七年八月二十日發行

トルストイ與付  
定價金三十錢

譯述者 加藤直士

東京市本郷區元富士町二番地

發行者 日高藤兵衛

東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 渡邊為藏

東京市京橋區日吉町四番地

印刷所 民友社

複製 不許

發行所

東京市本郷區  
元富士町二番地

日高有隣堂



有隣堂出版圖書  
大賣捌

東京市京橋區尾張町二丁目

東京市神田區表神保町

東京市神田區表神保町

東京市日本橋區箔屋町

京都市三條寺町

京都市二條寺町

大阪府南本町座摩前

大阪府心齋橋南久太郎町南

名古屋屋市宮町

靜岡市

仙臺市

岡山市

警

東

上

前

聖

若

杉

福

文

吉

紀

週

醒

京

田

書

書

書

音

星

見

書

港

營

社

堂

屋

川

房

店

店

社

堂

店

堂

堂